

# 林健太郎著作目録

松田 義男 編

2022年8月14日

2022年8月1日

## 目次

- I 著書
- II 共著<共編・編著含む>
- III 訳書
- IV 監修
- V 教科書
- VI 論文・評論等(新聞・雑誌掲載)
- 付 国会会議録

## 凡例

- \* 歴史学者林健太郎(1913~2004)の著作を、「I 著書」、「II 共著<共編・編著含む>」、「III 訳書」、「IV 監修」、「V 教科書」、「VI 論文・評論等(新聞・雑誌掲載)」に分類し、それぞれを年次順に配列した。最後に参議院議員としての発言(国会会議録)を付した。
- \* 単行書の再版・増補版は、原則として、初版に一括して[ ]に注記した。
- \* 単行書のうち叢書名と巻書名がある場合、巻書名を表題として採用し、叢書名を< >に示した。
- \* 単行書の目次内容あるいは新聞雑誌連載の小見出しを【 】で示した。
- \* 目次中の表題と本文表題とが異なる場合、原則として本文表題を採用した。
- \* 新聞・雑誌の連載は、初回掲載に一括した。
- \* 新聞・雑誌の特集名・掲載欄を適宜[ ]で示したほか、無題の場合は[ ]に示して仮題とした。
- \* 掲載雑誌の巻号数は、第1巻第1号→1-1と表記し、日刊新聞の号数は省略した。また、通巻号数を[ ]で記した場合がある。なお、第二次大戦後の『婦人公論』には巻次の乱れがあるが、本著作目録では日本近代文学館の巻号表示により1946年を30巻、以後各年を1巻、1954年を38・39巻とし、1955年を40巻、以後各年を1巻とした。
- \* 新聞の朝刊・夕刊については、夕刊についてのみ[夕刊]と注記した。
- \* 東京本社発行版と大阪本社発行版のある全国紙、たとえば『朝日新聞』でいえば、大阪本社発行版の場合『[大阪]朝日新聞』と記し、東京本社発行版と表題・掲載日が異なる場合は必要に応じて注記した。
- \* 無署名またはペンネームは<>に注記した。戦前期『歴史学研究』の無署名およびペンネームによる執筆については、「歴研思い出すまま」(『赤門うちそと』読売新聞社、1976年)127~130頁、『話』へのペンネームによる執筆、恩師の代筆として発表した著作については『移りゆくもの影』(文芸春秋新社、1960年)60~64頁、参照。また、今井登志喜執筆ではない著作(代筆)を削除している「今井登志喜年譜」(『今井登志喜』諏訪史談会、1984年)も参照した。
- \* 座談会・対談などについては、[ ]に出席者などを記した。
- \* 編者未見の著作については、\*を付した。
- \* その他、編者の注記は適宜[ ]で示した。

## 謝辞

本著作目録作成に際しては、石川県立図書館、石川武美記念図書館、大阪府立中央図書館、岡山県立図書館、岡山大学附属図書館、倉敷市立中央図書館、神奈川近代文学館、国立国会図書館、金光図書館、富山県立図書館、長崎県立長崎図書館、日本近代文学館、広島県立図書館、福島大学付属図書館、山口県立図書館より資料の閲覧・複写の便宜を得ました。付記して謝意を表します。

## I 著書

『列強現勢史・ドイツ』＜富山房百科文庫＞富山房、1938年6月18日【大類伸(林健太郎代筆)】序、序説、第1編ビスマルクよりヒットラーへ(1 ドイツ帝国の成立と其後の発展、2 世界大戦、3 共和政時代)、第2編ヒットラー治下のドイツ(1 ナチスの政権掌握、2 ナチス治下の四箇年、3 ドイツ最近の形勢)、第3編ドイツ精神文化の概観(1 ドイツ古典文化時代、2 十九世紀中葉の諸潮流、3 観念哲学の再興、4 芸術上の新傾向、5 ナチス文化の形成)】

『独逸近世史研究』近藤書店、1943年6月30日【グーツヘルシャフト考—東プロイセンに於けるその展開と性格—[書下ろし]／ドイツ保守主義小論／ビスマルクの国民思想について／ビスマルクとラッサール／第二次モロッコ事件におけるドイツの政策[大学卒業論文「一九一一年の国際危機の研究」の改題]／付録 歴史学の方法に関する覚書／跋】[「グーツヘルシャフト考」は「グーツヘルシャフトの成立と変質」と改題『近代ドイツの政治と社会』、「グーツヘルシャフトについて」と改題『プロイセン・ドイツ史研究』収録、『近代ドイツの政治と社会』から旧題「グーツヘルシャフト考」に戻して『ドイツ史論文集』＜林健太郎著作集第2巻＞収録。「第二次モロッコ事件におけるドイツの政策」は『国際関係の史的分析』(御茶の水書房、1949年)、『プロイセン・ドイツ史研究』『ドイツ史論文集』＜林健太郎著作集第2巻＞収録]

『歴史と現代』近藤書店、1947年4月10日【歴史学の諸問題(1 歴史学革新の前提、2 歴史学に於ける「実証」の意義、3 新しい歴史理論の方法、4 歴史学の科学性と芸術性、5 政治と歴史学)、現代の諸問題(1 自由の探求、2 ヒューマンイズムの歴史と課題、3 官僚制度の史的考察)、付録(1、ランゲ復興の意味、2 歴史家の立場、3)フリードリッヒ・マイネッケ小論】

『歴史学の方法』＜二十世紀教室5＞白日書院、1948年3月30日【1 歴史学の課題、2 研究の出発点、3 諸史料の考察、4 事実の確定、5 新たな事実・その調査、6 この事実の意味、7 史実の連関・因果関係の認識、8 研究対象の拡大、9 経済問題の重要性、10 この時代の経済的特徴、11 帝国主義・資本主義の問題、12 歴史の認識と現代の意識、跋】

『歴史の流れ(西洋文明小史)』若狭書房、1948年5月1日【1 人類の始め—野蛮 から文明へ、2 オリエンツの文明、3 エーゲ文明、ギリシア人の出現、4 アテネの全盛、ギリシア文化の精髓、5 アレクサンダー大王とヘレニズム世界、6 ローマの勃興、階級闘争とその結果、7 ローマ帝国、キリスト教の発生、8 民族大移動、現代諸国家の起源、9 東ローマとサラセン、10 封建制度、中世のキリスト教、11 十字軍、都市の発達、12 封建制度の動揺、13 ルネサンス、14 科学的精神、15 宗教改革、16 新しい社会、資本主義、17 近代国家の活動、人民の成長、市民革命とその後】[若狭書房の倒産により増補して改題『西洋文明小史』(千代田書房、1949年10月15日)【17 近代国家の活動、市民革命、18 近代の学問、芸術、19 代社会の大勢】、旧題に復して『歴史の流れ』＜市民文庫＞(河出書房、1951年6月30日)、『歴史の流れ』＜河出文庫＞(河出書房 1954年)、河出書房倒産により新版『歴史の流れ』＜新潮文庫＞(新潮社、1957年10月10日。33刷：1981年)]

『人間と思想の歴史』国立書院、1948年9月15日【はしがき、啓蒙専制政治の思想—一兵士の物語、ミラボーと「プロシア王国」／ドイツ市民精神／ゲオルク・フォルスターの悲劇／フランス革命と三人のドイツ人／敗戦国官吏の手記／ゲーテとシュタイン／若きマルクス／あとがき】[「ドイツ市民精神」を除き「人間と思想—十八・十九世紀交代期のドイツ—」と題して『ドイツの歴史と文化』＜林健太郎著作集＞第3巻収録]

『世界の歩み』上・下＜岩波新書＞岩波書店、1949年9月30日、1950年5月10日[第25刷改版1964年]【1 国家と世界、2「太陽の沈まぬ国」の変遷、3 胡椒と銀と羅紗、4 国王と人民(一)、5 国王と人民(二)、6 思想の力、7 自由の国の建設、8 嵐の三色旗、9 鋼鉄のリヴァイアザン、10 精神の王国、11 混乱と悩み、12 新しい始まり、13 三色旗と赤旗、14 民族主義の難問、15 鯨と熊の争い、16 資本主義の実験室、17 近代的自我の遍歴、18 妖怪の再現、19 武装の平和、20 破壊と再建、21 理想と現実、22 白人の重荷、23 独裁主義の夢魔、24 原子力時代】

『プロシア農業改革とユンカー経営の発展』〈社会構成史大系 第3部 世界史的発展の法則〉日本評論社、1950年3月[「十九世紀初頭の農業改革とユンカー経営の成立」と改題『近代ドイツの政治と社会』収録]

『近代ドイツの政治と社会 プロイセン改革に関する一研究』弘文堂、1952年9月15日【緒言、序説プロイセン改革とフランス革命、第1篇 プロイセン農民解放の性格(1 シュタインとシェーンの出発点、2 十月勅令に於ける諸思想の交錯、3 自由の実現—その諸問題、4 改革の帰結)、第2篇 東ドイツ農業制度の発展と十九世紀におけるその変化(1 グーツヘルシャフトの成立と変質、2 十九世紀初頭の農業改革とユンカー経営の成立)】

『史学概論』〈教養全書〉有斐閣、1953年5月30日【はしがき、1 歴史及び歴史学の語義、2 歴史学の対象とその範囲、3 歴史学における批判的方法、4 歴史の研究と歴史の叙述、5 歴史事実と歴史の理論、6 歴史理論としての地理的環境論、7 歴史理論としての発展段階説、8 唯物史観の諸問題、9 歴史法則に関する一般的問題、10 歴史法則に関する結論的考察、11 歴史における個別性の問題、12 歴史における人間性の理解、13 歴史における個別性と一般性、14 歴史認識の主観性と客観性、むすび】[改訂新版『史学概論』〈教養全書 6〉(有斐閣、1970年2月25日)は付論として「戦後歴史学の課題」(『歴史・この未知なるもの』(『展望』89、1966年4月)を改題)を収録、「戦後歴史学の課題」を除き註を若干改訂し『歴史学と歴史理論』〈林健太郎著作集第1巻〉収録]

『近代史の諸相』河出書房、1953年6月5日【はしがき／フリードリヒ大王／一兵士の物語／ミラボーと「プロシア王国」／敗戦国官吏の手記／ゲーテとシュタイン／若きマルクス／学生と革命／続学生と革命【書下ろし】／一九世紀の近代の始まり／十九世紀の諸革命／デモクラシーとナショナリズム】

『明日への歴史 人間が歴史をつくる』〈一時間文庫〉新潮社、1954年11月30日【1 歴史的なものの見方、2「歴史」という名の非歴史、3 現代の歴史の見方、4 民主主義の複雑さ、5 社会主義は真理か、6 共産主義の強味、7 国家と民族の役割、8 世界平和の問題、9 これからの日本、あとがき】[『明日への歴史』〈新潮叢書〉新潮社、1956年10月5日【増補：世界史の転換をいかに理解するか、ソ連におけるスターリン批判、あとがき】[『明日への歴史』〈新潮文庫〉新潮社、1958年6月2日]

『歴史と人間像』〈河出新書〉河出書房、1956年4月15日【I 歴史に入る途—文学と映画による歴史の勉強—【書下ろし】、II フリードリヒ大王／ゲオルク・フォルスターの悲劇／フランス革命と三人のドイツ人／ゲーテとシュタイン／若きマルクス／学生と革命、III 唯物史観の歴史性／トインビーの史観／あとがき】

『流れをとらえる—現代世界の見方—』新潮社、1957年4月30日【世界史の転換をいかに理解するか／力による平和と民衆による平和／歴史の事実とその判断／自衛と平和主義／ソ連は社会主義国でないか／ソ連におけるスターリン批判／スターリン主義外交への一批判／スターリン批判の意味／世界史的に見た国境問題／国民的利益と階級的利益／東欧の動揺の教えるもの／スエズ・ハンガリー問題／中近東問題の歴史／自由と進歩／史的一元論への反省／イギリスに見る秩序の感覚／のぞいて見た東ベルリン／トインビー教授の講演／歴史学の周辺／現代世界をどう見るか—あとがきをかねて—】

『現代社会主義の再検討』中央公論社、1958年6月25日【現代社会主義の再検討／マルクス主義と大衆社会論／ドイツ社会民主党史の教えるもの【書下ろし】／デモクラシーとナショナリズム／国家的利益の観念／唯物史観歴史学への提言／十九世紀の諸革命とマルクス主義／マルクス、エンゲルスと民族問題／三月革命と社会主義／註／あとがき】

『個性の尊重』新潮社、1958年9月30日【政治への発言(人工衛星と世界史／ひさかたの天路は遠し／積極的棄権と消極的投票／総選挙と社会党／日教組のあり方)、社会雑感(松川事件にちなんで／昭和史)論争について／婦人たちと学生たち／春と教師の悩み)、短評集(毛沢東の演説／金沢と九谷焼／若き学者の死／米国の全学連／自然と社会／歴史教育の問題／日本文化の地位／ある学校騒動／逆コース／弱い横綱)、しろうと批評(谷崎文学の魅力／遠くて近い世界／芥川と色彩感覚／山本富士子論／映画と文学による歴史の勉強)、人と私と(半履歴書(私の読書遍歴／私の卒業論文／処女論文／酒をぶち

まけた話／中国の留学生)、影響を受けた人(今井登志喜先生のこと／わが「転向」の師匠たち／ウィット  
フォーゲル氏との対話)、ヨーロッパの旅から(イギリスの養老院そのほか(養老院の日本人／C 夫人の  
不平)／G.P.グーチ博士訪問／カンタベリー・ケルン・ローマ／ゾンバルトの墓／カイロの一日)

『西欧と日本』＜日本文化研究 第2巻＞新潮社、1959年2月15日【はしがき、1 比較文化論の前提、  
2 日本社会史の特質】[1、2を『歴史と体験』収録、1を「文化・文明・社会」と改題『歴史学と歴史理  
論』＜林健太郎著作集第1巻＞収録]

『移りゆくものの影 インテリの歩み』文芸春秋新社、1960年2月20日【まえがき／銀杏並木の下で／  
暗さと明るさの谷間／自由の孤城に住みて／私の真空地帯／歴史家たちの争い／いくつかの出会いと  
別れ／附 現代の歴史観／書簡〔著者宛3通：3月15日、30日付亀井高孝書簡、3月14日付四海太郎  
葉書〕【『現代の歴史観』『書簡』を除き『歴史と体験』収録]

『現代史の方向』＜普及会講演 28＞外交知識普及会、1962年8月25日[1962年7月28日外交知識普  
及会佐賀地区講演会の講演速記録に加筆]

『歴史と現実』新潮社、1962年10月30日【まえがき、I ベルリン・一九六一年／ワイマル共和国と現代  
日本／この十年・世界と日本／愛国心の理論と実践／博物館の重要性／現代歴史学の課題／ロストウ  
の歴史理論と唯物史観、II 憲法論議の問題点／国際政治と平和の問題／現代の帝国主義論／外交政策  
の幅と筋／平和運動の心理と論理／西ドイツは阿呆の国か／あとがき]

『ワイマル共和国 ヒトラーを出現させたもの』＜中公新書＞中央公論社、1963年11月18日【1 共和  
国の成立、2 民主主義か独裁か、3 一月蜂起、4 憲法と平和条約、5 カップー揆、6 内外の難問、7 一  
九二三年の危機、8 シュトレゼマン時代、9 経済復興と社会主義、10 経済恐慌の襲来、11 大統領内  
閣、12 共和国の最期】[『第一次世界大戦後のドイツと世界』＜林健太郎著作集 第4巻＞収録]

『世界史と日本』新潮社、1965年5月30日【まえがき／外交政策における理想主義と現実主義／平和  
のイデオロギーと平和の政策／ド・ゴール外交の性格／中ソ論争の神話と現実／マルクス主義の歴史  
的背景／社会主義とは何であったのか／混合政府論／戦後史をどう観るか／竹山道雄と清水幾太郎／  
太平洋戦争から学ぶもの／世界の動きと日本／世界史における日本の地位／歴史認識の二つの途／あ  
とがき】

『歴史と政治』有信堂、1965年8月15日【I 歴史と政治ードイツ史学の場合ー／ゲーテとフランス革  
命／ラーン川のほとりーシュタインとビスマルクー／ワイマル共和国の人間像／ミュンヘン革命の悲  
劇／シュトレゼマンの人物／西ヨーロッパの一体化ーEECの歴史的背景ー、II ヤスパースの世界史  
観／過去の償いーヤスパースの「ハフトゥング」論ー／トインビーの史観について／G・P・グーチ博士  
とその業績／付 G.P.グーチ博士の健在／ゲルハルト・リッター教授との一時間／ミュンヘンの「現代史  
研究所」、III 日ソ文化交流の方向／イデオロギー外交の終わり／日本のナショナリズム／カトリック  
と政治／保守主義の復権／日本の動き・世界の動きー一九六三ー六四ー(正しい現実認識を 冷戦緩和  
にあたって／精神面の再認識を 池田首相の倍增計画／「侵略」もはや不可能 世界史の新しい歩み／国  
民的利益をめざせ 自民、組織政党への道／調和のある発展を「人づくり」の出発点／追られる生活向  
上／論争する中ソの内情／新興国共通の課題 近代化と伝統の結合／的を射た批判なし 自民総裁争い  
に失望／農民解放を助けよ 東南アでの米の義務／「科学」から「空想」へ 社会主義の新しい道／現在の  
国際情勢と日本の立場／歴史の流れは変わった／明治百年と戦後二十年】[ドイツ史関連の評論(ゲーテ  
とフランス革命／ラーン川のほとりーシュタインとビスマルクー／ワイマル共和国の人間像／ミュン  
ヘン革命の悲劇／シュトレゼマンの人物／ゲルハルト・リッター教授との一時間)は「歴史の断章」  
『ドイツの歴史と文化』＜林健太郎著作集＞第3巻収録]

『共産国 東と西』新潮社、1967年4月15日【文化大革命見参記ー中共二週間の旅ー／文化大革命の問  
題点ー日本の思想界との関連におけるー／大いなる幻影ーソ連東欧の旅からー／ロシア人は馬鹿なの  
か？ー私の実感的ソ連論ー／東ヨーロッパの歴史家たちーブタベスト・ブラーハ・ワルシャワ・モス  
クワー／東欧諸国の複雑さー非スターリン化の悩みー／ソフィアの二日間ーはからざる親日家との出

会い―[書下し]／あとがき】[『ソフィアの二日間』は『歴史と体験』『わが師わが旅』に再録]

『二つの大戦の谷間』<大世界史 22>文芸春秋、1969年2月25日[改題『両大戦間の世界』<講談社学術文庫>講談社、1976年】【1 ウィルソンとクレマンソー、2 ヴェルサイユ条約、3 指導者レーニン、4 東欧諸国の民族主義、5 ドイツ共産革命の失敗、6 混乱から安定へ、7 ワイマル共和国と第三共和国、8 斜陽の大英帝国、9 ムッソリーニの登場、10 ウィルソンとローズヴェストとのあいだ、11 スターリン体制の確立、12 経済恐慌の襲来、13 岐路一九三二年、14 さまよえるヨーロッパ人、15 すぎさったもの、すぎさらぬもの】[『第一次世界大戦後のドイツと世界』<林健太郎著作集 第4巻>収録]

『歴史と体験』<人と思想>文芸春秋、1972年3月25日【ドイツの歴史から(ドイツの歴史と文化／ミラボーと「プロシア王国」／ゲーテとシュタイン／ドイツ市民精神／学生と革命／一九三〇年代の日本とドイツ／ワイマル共和国と現代日本)、マルクス主義をめぐって(マルクス主義の歴史的背景／三月革命と社会主義／マルクス・エンゲルスと民族問題／社会主義とは何であったのか／現代の神話・バリコミュン)、歴史の理論について(文化・文明・社会／日本社会史の特質／現代歴史学の課題)、移りゆくものの影(まえがき／銀杏並木の下で／暗さと明るさの谷間／自由の孤城に住みて／私の真空地帯／歴史家たちの争い／いくつかの出会いと別れ)、共産国 東と西(文化大革命見参記―中共二週間の旅―／ロシア人は馬鹿なのか?―私の実感的ソ連論―／ソフィアの二日間―はからざる親日家との出会い―)、大学紛争の中から(大学の騒ぎの中で／東大紛争の一年／東大紛争雑感／歴史の遊戯を脱れて)】

『日中・日米問題を廻って』<1972年11月9日、日本工業倶楽部木曜講演会講演要旨 第550回>日本工業倶楽部、1972年11月

『ドイツ史論集』中央公論社、1976年1月24日【I プロイセン改革とフランス革命、II プロイセン農民解放の性格、III 三月革命と社会主義、IV ドイツ帝国の成立とビスマルク時代、V ビスマルクとラッサールの会談について、VI ビスマルクの失脚をめぐる諸問題、VII レオポルト・フォン・ランケの人と学問、VIII フリードリヒ・マイネッケの生涯と思想、付録 1 一八四八年革命の百年、2 戦後ドイツのランケ研究】

『赤門うちそと』読売新聞社、1976年3月20日【I 総長と学長／ルートヴィヒ・リースのこと／ベルツとリース／学者の老健／田中美知太郎先生のこと／田中美知太郎氏の『時代と私』／木村健康さんのこと／追悼・池島信平さん／三島由紀夫と私／保守革命家の悲劇、II 六中今昔／一高時代の思い出／野球と私／洋書の匂い／私の学生時代／忘却の精神／歴研思い出すまま／ハイデルベルクの友／常呂遺跡／本を読む意味／対照と類似／日記から(春の雪／紅梅の花／国体協／小鳥たち／枢軸時代／長寿／日蘭研究所／風景画／帝国主義／児雷也／富士山／白線と短剣)／直言(教師と聖職／沖縄・ルソン／チェコの話／社会と大学／西洋の近代劇／フィリピン／DAAD／トインビー／ビスマルクとシュトレゼマン／大学百年／ソウルの秋／平等主義)、III 今もなお厚い壁／モスクワとミュンヘン／オリンピックとアラブ・ゲリラ／偉大な建前の国／中国の旅、IV 新入学生への言葉／鷗外と歴史／国民参政八十五年／あとがき】

『プロイセン・ドイツ史研究』東京大学出版会、1977年6月24日【はしがき、第1部グーツヘルシャフトについて/ビスマルクとドイツ統一思想/第二次モロッコ事件におけるドイツの政策、第2部ブランデンブルク、プロイセンの歴史/付録1 ユンカーJunker/付録2 プロイセン改革/ドイツの統一と戦争/付録3 ドイツ連邦 Deutscher Bund/付録4 ドイツ関税同盟 Deutscher Zollverein/付録5 フランクフルト国民議会(正しくはドイツ国民議会)Deutsche Nationalversammlung/付録6 ドイツ帝国 Deutsches Kaiserreich, Deutsches Reich】[『プロイセン改革』を「ブランデンブルク、プロイセンの歴史」に統合、一部を削除して『ドイツの歴史と文化』<林健太郎著作集>第3巻収録]

『歴史の精神』<講演集>実業之日本社、1978年7月20日【I 戦後教育の反省、教育と文化的伝統、今日の大学の問題、最近のドイツの大学を見て、(付)大学の役割、II ヨーロッパと日本、君主制と天皇制、III マルクスと一八四八、九年の革命、ワイマール共和国の崩壊、IV 歴史の理論と方法、歴史とフィクション】

『ヨーロッパと日本』＜精神開発叢書 60＞富山県教育委員会、1979年1月22日【はじめに／日本文化の中のヨーロッパ／明治の”和魂洋才”／当面する困難な問題／近代化の基礎にある文化水準／評価される明治期／宣教師の目から見た日本人／共通点の多いヨーロッパと日本／近代化への過程と封建制／新しい文化の担い手／文化の根底にかかわる宗教／おわりに】

『今井登志喜』諏訪史談会、1984年12月5日【序言／今井登志喜・その生い立ち／今井登志喜・一高時代の一面／今井登志喜と日本の歴史学／都市学会の設立とその事業／東大経済学部事件と今井登志喜、遺稿(一)明治末の学生、遺稿(二)戦後歴史教育論、今井登志喜年譜】

『外圧に揺らぐ日本史 教科書問題を考える』＜カッパ・ホームズ＞光文社、1987年3月20日【1「日本史」をめぐる内・外圧、2日本民族にとって記紀・天皇とは何か、3歴史教育はどうあるべきか、4太平洋戦争の検証、5中国・韓国の問題とする史実と検定制度、あとがき】

『ドイツ革命史 1848・49』山川出版社、1990年7月11日【まえがき、1革命前のドイツの状態、2三月の諸事件、3ドイツ国民議会の成立、4ドイツ革命の国際問題、5プロイセン、オーストリアの情勢の変化、6ドイツ国憲法の起草と統一事業の挫折、7ドイツ革命の終結、8一八四八・四九年革命とドイツ労働運動、附1一八四八年革命の百年、附2参考文献について】

『世界と日本』[平成3年5月24日講演(於経団連会館)]＜日経調査資料 91-4＞日本経済調査協議会、1991年7月23日

『昭和史と私』文芸春秋、1992年11月1日[文春文庫 2002年、文春学芸ライブラリー(文庫)、2018年]【1昭和の幕開け、2南京事件と山東出兵、3満洲某重大事件と天皇の悲劇、4「旧制高校」というもの、5マルクス主義の心酔した頃、6西洋史との出会いと滝川事件、7二・二六事件と昭和天皇の決断、8スペイン内乱とシナ事変、9東大経済学部の内紛、10太平洋戦争と私の召集、11敗戦から戦後へ、12共産党シンパから社会党シンパに、13戦後日本の大きな岐路、14冷戦のはじまり、15清水幾太郎と全面講和運動、16進歩的文化人との最初の論争、17六〇年安保騒動の前夜、18二年間の欧米留学、19ベルリンに壁がつくられた日、20安保騒動後の日本、そして世界、21東大紛争百七十二時間の軟禁、22昭和は終わりベルリンの壁は崩れた】

『歴史学と歴史理論』＜林健太郎著作集第1巻＞山川出版社、1993年1月30日【史学概論/戦後歴史学の諸問題/現代歴史学の課題/文化・文明・社会/近代歴史学の父レオポルト・フォン・ランケ/ランケ「自伝」】

『ドイツ史論文集』＜林健太郎著作集第2巻＞山川出版社、1993年1月30日【プロイセン改革とフランス革命/プロイセン農民解放の性格/グーツヘルシャフト考/一八四八—四九年革命と社会主義/ドイツ帝国の成立とビスマルク時代/ビスマルクとドイツ統一思想/ビスマルクとラッサールの会談について/ビスマルクの失脚をめぐる諸問題/第二次モロッコ事件におけるドイツの政策】

『ドイツの歴史と文化』＜林健太郎著作集第3巻＞山川出版社、1993年4月1日【ドイツの歴史と文化/ブランデンブルク、プロイセンの歴史/ドイツの統一と戦争/ドイツ市民精神/人間と思想—一八・十九世紀交代期のドイツ—(啓蒙専制政治の思想/一兵士の物語、ミラボーと「プロシア王国」/ゲオルク・フォルスターの悲劇/フランス革命と三人のドイツ人/敗戦国官吏の手記/ゲーテとシュタイン/若きマルクス)/歴史的断章—十九世紀から二十世紀—(ゲーテとフランス革命/ラーン川のほとり—シュタインとビスマルク—/ビスマルクの伝記[初出未詳]/ワイマル共和国の人間像/ミュンヘン革命の悲劇/シュトレゼマンの人物/シュトレゼマンとドイツ人民党/ゲルハルト・リッター教授との一時間)/第一次世界大戦とドイツの歴史家たち/フリードリヒ・マイネッケの生涯と思想】

『第一次世界大戦後のドイツと世界』＜林健太郎著作集第4巻＞山川出版社、1993年4月1日【ワイマル共和国、両大戦間の世界】

『歴史からの警告 戦後五十年の日本と世界』中央公論社 1995年4月10日[中公文庫、1999年]【「居

傲の宗教」の終焉／パリ憲章と「ヨーロッパ共同の家」／革命はその子を貪り食った／日本共産党の天皇批判の批判／今日の世界状況と小泉信三／両世界大戦原因の考察／「奥野大臣発言」の問題性／戦争責任というもの／1923年という年／湾岸戦争と日本国憲法(湾岸戦争とアラビスト、パシフィストの論理／湾岸戦争が残したもの／日本国憲法の問題点)／「東京裁判史観」論議／フィリピン、ビルマの独立と日本の大陸進出について／歴史の事実と解釈／中国ナショナリズムと国際共産主義／日本政治の自殺／「永野法相発言」を考える／村山政権の成立とその批判／あとがき】

『戦後五十年の反省 国際化時代と日本の将来』原書房、1996年9月28日【I(1 現代の奇跡・ドイツ統一、2「歴史の終わり」と「文明の衝突」、3 公正の論理と倫理の回復、4 民意を表わさぬ連立政権、II(5 繁栄のなかに蓄積された空虚、6 戦後五十年と阪神淡路大震災、7 戦後日本における「俗言」論、8 オウム事件「原因還元論」の弊、III(9 村山内閣の歴史的意味、10 一九八九年を忘れるな、11 国家常任理事国入りの必要)、IV(12 修正主義いろいろ、13 歴史科の独立について、14 昭和思想史と清水幾多郎、15 追悼 福田恆存)】

『わが師わが旅』KTC 中央出版、1996年12月17日【I わが住処武蔵野今昔、II わが師(小学校の時の先生方／関東大震災前後／張作霖の友人／御苑の華／美術開眼の師／ギリシア悲劇／学者の老健／大学の恩師[新稿])、III わが旅 1 アジア(扶餘を訪れて／隣りの国／江華島／ハングルと漢字／文化大革命見聞記／学術文化訪中使節団／北京と長春／一筋の道／タイの表情／インドネシアいろいろ)、2 ヨーロッパ(クマエの巫女／ベルリンの文化自由会議／ミュンヘンの下宿生活／冬の旅／ドレスデン／鑑真和尚パリへ行く／ロンドンの「江戸展」／ジャパン・イン・ロンドン／ロンドンの地下鉄／左と右／ソフィアの二日間／バルカンの親日国／一〇〇ワット電球のメッセージ)、3 アメリカ・アフリカ(自衛と平和主義／アメリカ教育事情雑感／カリブ海の真珠／カイロの歌舞伎)、IV わが家の記[新稿]】

『バイエルン革命史 1918-19年』山川出版社、1997年10月30日【まえがき、序章 ドイツの中のバイエルン、1 第一次世界大戦前のバイエルン社会民主党、2 クルト・アイスナーの出自とその活動、3 第一次世界大戦と社会民主党・アイスナー、4 バイエルン革命の経過、5 アイスナー政府の政策、6 議会選挙と諸政党の動向、7 アイスナーの暗殺、8 権力の空白とラディカル派の活動、9 バイエルン・レーテ共和国、10 バイエルン革命の問題点、あとがき—史料および文献について、バイエルン革命史年表】

## II 共著<共編・編著含む>

河村君について『河村俊平追想録』河村茂徳編、河村茂徳、1937年6月25日

歴史学方法論『歴史』<哲学教養講座 第5巻>竹内富子編、三笠書房、1939年7月15日[「歴史学の方法に関する覚書」と改題『独逸近世史研究』収録]

西洋の歴史家『学生と歴史』河合栄治郎編、日本評論社、1940年4月1日[第2版：1946年11月1日]

自由主義と民族主義—十八・九世紀のドイツ—『ヨーロッパ市民精神』<世界歴史 第6巻>河出書房、1941年6月15日[「ドイツ市民精神」と改題『人間と思想の歴史』『歴史と体験』『ドイツの歴史と文化』<林健太郎著作集>第3巻収録]

歴史学と政治『学問と政治』東大協同組合出版部、1947年10月5日

『唯物史観研究 第一集「物」の概念』<二十世紀研究所紀要>白日書院、1948年10月25日[1947年9月13日、討論：清水幾太郎、宮城音彌、真下信一、渡辺慧、大河内一男、山田坂仁、栗田賢三、古在由重]【1「物」の概念、2唯物史観における人間、3「主体性」の問題、4弁証法】

『概説西洋歴史』上・下巻、亀井高孝共著、大八洲出版、1948年5月30日、10月15日[再刊：吉川弘文館、1949年5月5日、6月15日[主として下巻(近世後期以後)を執筆]【古代1上古の東方諸国、2ヘレネス文化の生成と発展、3地中海世界の統一)、中世(1諸民族の活動、2ローマ教会、封建制度、3国民国家の興起)、近世前期(1近世初期の三大運動、2西欧諸国の政教の紛乱、3絶対専制政治の時代、4ヨーロッパ人の世界進出)、近世後期(1近代社会の創造、2ヨーロッパの復旧とその波紋、3二月事件とその結末、4ヨーロッパ列強の発展、5アメリカ合衆国の成長、6普仏戦争以後のヨーロッパ、7帝国主義の開始と進展、8第一次大戦前の世界、9第一次世界大戦)、現代(1国際主義の発展、2第一次大戦後の列強の状態、3全体主義と民主主義の対立、4第二次世界大戦、5第二次大戦後の世界)】

『西洋史学入門 上巻』<編>今井登志喜監修、大月書店、1948年7月20日

プロイセン改革／編集者の言葉『西洋史学入門 下巻』<編>今井登志喜監修、大月書店、1948年7月20日[改題改訂版『西洋史学大綱』河出書房、1952年5月15日]

世界史と日本『新女性全書 教養篇』鎌倉文庫編・刊、1948年8月15日

ドイツ十一月革命『市民革命の研究』三一書房、1948年12月1日

出世に就て[「変革期に於ける処世哲学』『九原則下の日本の働きと我々の生活戦術』<『自由国民』19>時局月報社、1949年3月10日

銀杏並木の感慨『大学生活』天野貞祐編、光文社、1949年5月25日

西洋史『日本の人文科学 回顧と展望』人文科学委員会編、印刷庁、1949年5月25日

『ライン新聞』より/新ライン新聞より/ドイツ帝国憲法戦役/イタリー問題より/プロシア軍事問題とドイツ労働者党/権力原理について/ロシア社会論/ドイツ帝国議会におけるプロシアの火酒/新ドイツ帝国建設の際における強力と経済『マルクスエンゲルス著作解題』歴史科学研究所編、黄土社、1949年10月30日

第二次モロッコ事件におけるドイツの政策『国際関係の史的分析』江口朴郎・高橋幸八郎共著、御茶の水書房、1949年11月1日

歴史法則『社会科学辞典』河出書房編集部編、河出書房、1949年11月30日

現代の世界／読者のために『物語西洋史 近世』<中学生全集 42>斎藤清太郎著・林健太郎増補、筑摩



書房、1950年6月5日

十九世紀の諸革命[「変革過程の史的分析」]『近代社会の成立』〈社会科学講座 第4巻〉弘文堂、1951年1月30日[『近代史の諸相』、「十九世紀の諸革命とマルクス主義」と改題『現代社会主義の再検討』収録]

関税同盟『世界歴史事典』第4巻、平凡社、1951年9月25日

十九世紀前半の政治と社会『西洋十九世紀 1 古典主義浪漫主義』〈世界美術全集 22〉1951年5月20日[「一九世紀の近代の始まり」と改題『近代史の諸相』収録]

『史料世界史』上・下、村川堅太郎・江上波夫・林健太郎編、山川出版社 1951年9月15日

解説『西洋政治史』今井登志喜著、岩波書店、1952年1月25日

シュタイン(ロレンツ・フォン)『世界歴史事典』第9巻、平凡社、1952年4月20日

アナーキズム『世界と国家』〈新倫理講座 第5巻〉創文社編集の部編、創文社、1952年9月15日

ドイツ(総説/歴史)/ドイツ進歩党/ドイツ帝国/ドイツ連邦『世界歴史事典』第13巻、平凡社、1952年11月28日

バイエルン『世界歴史事典』15巻、平凡社、1953年4月15日

ブランデンブルク/フランクフルト国民議会『世界歴史事典』第16巻、平凡社、1953年6月30日

プロイセン/プロイセン改革『世界歴史事典』第17巻、平凡社、1953年8月30日

歴史用語の解説『現代用語の基礎知識 1954年版』自由国民社、1953年10月10日

世界史の発展法則『明日への課題』〈現代史講座 第5巻〉創文社編集部編、創文社、1953年11月25日

ユンカー/ランケ『世界歴史事典』第19巻、平凡社、1953年12月15日

現代とは何か[「共同討議 世界史に於ける現代」]『戦後日本の動向』〈現代史講座別巻〉創文社、1954年8月5日[共同討議：上原専祿、竹山道雄、丸山真男、務台理作、鈴木成高(司会)][久野収編『現代日本論』〈戦後日本思想大系 15〉(筑摩書房、1974年)収録]

世界と日本—分析と課題—[「共同討議 世界史に於ける現代」]『戦後日本の動向』〈現代史講座別巻〉創文社、1954年8月5日[共同討議：上原専祿、都留重人、鈴木成高、丸山真男、務台理作、林健太郎(司会)][臼井吉見編『日本の近代』〈現代教養全集 13〉(筑摩書房、1959年)収録]

現代歴史学の諸問題『西洋史研究入門』〈編著〉井上幸治・林健太郎・有沢広巳・山元正宣編、東京大学出版会、1954年12月20日

明日への歴史—現代をどう考えるか—『社会』〈教師のための教養講座 IV〉東京都立教育研究所編、明治図書出版、1955年10月1日

序説『ドイツ史』編著〈世界各国史 III〉山川出版社、1956年4月20日[新版：1977年3月30日、増補改訂版：1991年]

歴史学を学ぶ人のために『学生と教養』〈現代学生講座 4〉河出書房、1956年9月15日

イギリス『幸福と自由』〈現代教養講座 2〉桶谷繁雄等編、角川書店、1957年1月10日

歴史用語(A)『現代用語の基礎知識 1957年度版』〈自由国民事典版〉自由国民社、1957年3月20日

西洋史学『人文科学の名著』〈毎日ライブラリー〉淡野安太郎編、毎日新聞社、1957年3月25日

『人間はどれだけの事をしてきたか 社会編』<新編日本少国民文庫 2>林孝子共著、新潮社、1957年3月25日【まえがき、くち絵の解説、1 人間のはじまり、2 オリエントの国々、3 ギリシアの都市国家、4 ローマ帝国とキリスト教、5 中世の世界、6 中世の終わり、7 ルネサンス、8 新航路の発見、9 宗教改革、10 ヨーロッパ諸国の活動、11 革命の時代、12 自由と統一のためのたゞかい、13 民主主義の発展、14 現代の世界】

国家的利益の観念『民族の思想』<岩波講座現代思想 第3巻>岩波書店、1957年4月25日[『ナショナル・インタレストの概念』<『国防政策々定過程と用語大系』別冊>(防衛研修所、1959年)収録]

トインビー博士の人物と思想『歴史の教訓』A.J.トインビー 著、岩波書店、1957年5月23日

総説『自由主義と国民主義』編<世界史大系 12>誠文堂新光社、1957年12月15日

人間の自由について『現代の思想』大島康正編<現代教養文庫>社会思想社、1958年3月31日[座談会：久野収、高見順、大島康正(司会)]

\*芥川と色彩感覚『芥川龍之介全集 第2巻 月報』筑摩書房、1958年3月[『個性の尊重』収録]

遠くて近い世界『谷崎潤一郎全集 第6巻 付録』中央公論社、1958年3月[『個性の尊重』収録]

日本文化の伝統と変遷『日本文化の伝統と変遷』日本文化フォーラム編、新潮社、1958年5月30日[シンポジウム：高柳賢三、木村健康、高坂正顕、鈴木成高、西谷啓治、平林たい子、竹山道雄、関嘉彦、大平善悟、河北倫明、唐木順三、石井良助、直井武夫、ハバート・パシン、E・G・サイデンステッカー、ジョセフ・ロゲンドルフ]

愛国主義について『世界と日本の道德教育』<講座現代倫理 第9巻>筑摩書房、1958年7月25日[『愛国心』<現代のエスプリ 42>(至文堂、1970年6月25日)収録][復刻『教育基本法問題文献資料集成1 第5巻 世界と日本の道德教育』<日本現代教育基本文献叢書>日本図書センター、2006年]

伝記の重要性[「推薦の辞」]『人物叢書 内容見本』吉川弘文館、1958年

ヨーロッパにおける自由主義と国民主義『近代社会の成立』<東大教養西洋史 3>吉岡力等編、東京創元社、1959年1月10日

藤原浩君のこと『イギリス経済史研究』藤原浩著、御茶の水書房、1959年3月10日

安保問題の解剖『安全保障体制の研究 下』<時事新書>時事通信社、1960年1月20日

座談会 大戦間時代『大戦間時代』<世界の歴史 16>筑摩書房、1962年3月5日[座談会：石上良平、竹内好、遠山茂樹、猪木正道][新訂版：1979年12月10日]

ロストウの歴史理論と唯物史観『世界史の諸問題』<世界の歴史 別巻>筑摩書房編集部編、筑摩書房、1962年6月25日[『歴史と現実』収録]

西ヨーロッパの一体化 世界歴史における意義『EEC 変貌するヨーロッパ』<ペリかん・しんしょ>荒木信義編著、論争社、1962年7月5日[増補版：ペリかん社、1965年3月20日]

田中美知太郎先生のこと『田中美知太郎全集 第9巻 月報』筑摩書房、1963年4月[増補版『田中美知太郎全集 第9巻 月報』1988年4月][『赤門うちそと』収録]

世界史の問題『歴史理論と歴史哲学』<講座哲学大系 第4巻>田中美知太郎編、人文書院、1963年9月15日[『歴史理論と歴史哲学』(人文書院、1977年)]

解説 現代における保守と自由と進歩『新保守主義』<編><現代日本思想大系 35>筑摩書房、1963年12月10日[『現代への反逆としての保守』<リーディングス戦後日本の思想水脈 7>(岩波書店 2017年)抄録]

日本文化の伝統と変遷『日本的なるもの 日本文化の伝統と変遷 2』日本文化フォーラム編、新潮社、

1964年1月30日[シンポジウム：高柳賢三、西谷啓治、高坂正顕、竹山道雄、ジョセフ・ロゲンドルフ、久保正幡、鈴木成高、平林たい子、坂田吉雄]

序フェニックスの誇りと悩み『ドイツ・オーストリア』岩崎英二郎・西川治共編<世界の文化地理 第10巻>講談社 1964年7月25日

ゲーテとフランス革命『世界の文学 第5巻ゲーテ 付録18』中央公論社、1964年7月[『歴史と政治』『ドイツの歴史と文化』<林健太郎著作集第3巻>収録]

ラインからミュンヘンへの旅『ドイツ・スイス』<世界の旅 第3>座右宝刊行会編、小学館、1964年9月30日

戦争と歴史家たち『歴史と人物』日本歴史学会編、吉川弘文館、1964年11月3日[『ドイツの歴史と文化』<林健太郎著作集>第3巻収録]

\*[推薦文]『トロツキー伝 内容見本』新潮社、1964年

核時代における日本革新諸勢力の国際路線[第一分科会報告]『民主社会主義の未来像 新時代に直面して 第6回民主社会主義全国研究会議報告書』民主社会主義研究会議、1965年5月1日

核時代における日本革新諸勢力の国際路線『民主社会主義の未来像 新時代に直面して 第6回民主社会主義全国研究会議報告書』民主社会主義研究会議、1965年5月1日[討議：大島康正、高坂正堯、曾禰益、林健太郎、蠟山道雄、武藤光朗]

ドイツの歴史と文化/図版解説『世界の文化 9 ドイツ』座右宝刊行会編、河出書房新社、1965年10月31日[「ドイツの歴史と文化」を『歴史と体験』『ドイツの歴史と文化』<林健太郎著作集第3巻>収録]

『世界の戦史』<全10巻>大類伸監修、林健太郎・堀米庸三編、人物往来社、1965~1967年

古代オリエントの興亡『古代オリエントの興亡』<世界の戦史1>1965年6月10日[座談会：三笠宮崇仁、尾鍋輝彦、山本茂、板倉勝正、佐藤進、定金石源二]

『ダリウスとアレクサンダー大王 西洋の興起』<世界の戦史2>1966年7月18日

『シーザーとローマ帝国 世界帝国の建設』<世界の戦史3>1966年8月18日

『十字軍と騎士 カール大帝とジャンヌ・ダルク』<世界の戦史4>1966年9月18日

『ルネサンスと宗教戦争 陰謀と熱狂』<世界の戦史5>1966年10月18日

古典的絶対主義の時代『ルイ十四世とフリードリヒ大王 絶対主義と継承戦争』<世界の戦史6>1966年11月18日

革命戦争の時代『ナポレオンと国民戦争 革命と解放』<世界の戦史7>1966年12月18日

ナショナリズムと戦争/ドイツ統一戦争『ビスマルクとリンカーン 列強の抗争』<世界の戦史8>1967年1月18日[「ドイツ統一戦争」を「ドイツの統一と戦争」と改題]『プロイセン・ドイツ史研究』『ドイツの歴史と文化』<林健太郎著作集>第3巻収録]

二〇世紀の開幕『第一次世界大戦 最初の国家総力戦』<世界の戦史9>1967年2月18日

二次世界大戦の革命性『第二次世界大戦 全体主義と民主主義』<世界の戦史10>1967年3月18日

『ドイツ現代史総合文献目録』<編>東京大学出版会、1966年3月31日

日本の平和運動と労働運動のあり方[第三分科会討議]『日本の安全と福祉を求めて』民主社会主義研究会議、1966年5月20日[討議：上西正雄、佐瀬昌盛、末次一郎、吉田忠雄]

ビスマルク『歴史よもやま話 西洋篇』文芸春秋、1966年9月1日(<文春文庫>文芸春秋、1982年)[座談会(1965年12月14日NHK放送)：池島信平、神川彦松]

概説 歴史とは何か、解説(人間精神進歩の歴史/歴史哲学緒論/共産党宣言・『経済学批判』序文/ヨーロッパ文明史/歴史と自然科学/精神科学における歴史的世界の構成/歴史の研究)『歴史とは何

- か』編集解説<現代のエスプリ 18>至文堂、1966年9月15日
- ドイツ・ロシア『日本における歴史学の発達と現状 II—日本史・東洋史・西洋史—』国際歴史学会議日本国内委員会編、東京大学出版会、1966年11月25日
- 総説『西洋史研究入門(新版)』<編著>井上幸治共編、東京大学出版会、1966年12月20日
- \*[推薦文]『近代の戦争 内容見本』人物往来社、1966年
- 世界史用語の解説『現代用語の基礎知識 1967年版』自由国民社、1967年1月1日
- 島田雄次郎氏とその大学史研究『科学革命と大学』エリック・アシュビー 著・島田雄次郎訳、中央公論社、1967年8月23日[<中公文庫>(中央公論社、1977年)、再刊:玉川大学出版部、1995年]
- むかしの皇室これからの皇室『皇室の100年』<『毎日グラフ別冊』8-7>、1967年11月[座談会:池田弥三郎、大宅壮一、立野信之]
- 世界史用語の解説『現代用語の基礎知識 1968年版』自由国民社、1968年1月1日
- 国際政治と安全保障『核時代の日本を考える』<時局問題講演集第1集>月刊時事社編、月刊時事社、1968年7月20日
- 『現代日本人の思想』<国民講座・日本人の再建 1>国民講座・日本人の再建編集委員会編、原書房、1968年7月20日[討議:会田雄次、大島康正、鯖田豊之、西義之、福田恆存、福田信之、三島由紀夫、村松剛]
- 家永三郎氏との論争について『歴史教育と教科書論争 亡国の論理を衝く』宇野精一編、日本教文社、1968年9月15日
- 世界史用語の解説『現代用語の基礎知識 1969年版』自由国民社、1969年1月1日
- 忘却の精神/あとがき『回想・東京大学100年』編著<日本ビッグ3・人物シリーズ>ビデオ出版、1969年7月5日[「忘却の精神」は『赤門うちそと』収録]
- 現代歴史学の課題『新しい歴史像』<講座日本の将来 8>増田四郎・堀米庸三編、潮出版社、1969年9月10日[『歴史と体験』『歴史学と歴史理論』<林健太郎著作集第1巻>収録]
- マイネッケの生涯と思想『世界の名著 54 マイネッケ』<編>中央公論社、1969年9月25日[<中公バックス>1980年][「フリードリヒ・マイネッケの生涯と思想」と改題『ドイツ史論集』『ドイツの歴史と文化』<林健太郎著作集>第3巻収録]
- 市民と国家—市民の二義性について—『日本は国家か』日本文化会議編、読売新聞社、1969年9月30日[日本文化会議主催「日本は国家か」特別研究会(1968年4月12日)討論:田中美知太郎(問題提起者)、大谷恵教(司会)、佐伯彰一]
- 総括討論 日本は国家か『日本は国家か』日本文化会議編、読売新聞社、1969年9月30日[日本文化会議主催「日本は国家か」特別研究会(1968年4月13日)討論:泉靖一(司会)、高坂正堯、田中美知太郎、坂本二郎、武藤光朗、山崎正和、佐伯彰一、若泉敬、吉田富三、林房雄、西義之、大谷恵教、会田雄次、鈴木重信、野田宣雄]
- 絶対主義の時代『ヨーロッパの宮殿』編著<世界の文化史蹟 第15巻>講談社、1969年10月25日[新装版:1978年]
- 歴史とは何か『世界の中の日本 歴史とは何か』<教養講座シリーズ 10>国立教育会館編、帝国地方行政学会、1970年5月25日【第1講 歴史学・歴史観の発展過程(はじめに、1 歴史学の発生の二つの要因、2 ギリシアの歴史観、3 中世の歴史観、4 ルネサンス期の歴史観、5 啓蒙主義の歴史観、6 近代歴史学の発生、7 近代歴史学に対する批判、8 新カント派の歴史観 9「生の哲学」の歴史観)、第2講 唯物

史観とその諸問題(はじめに、1 マルクス主義の歴史観と生成過程、2 マルクスの歴史観の発展、3 唯物史観と現代)、第3講 現代の歴史観(はじめに、1 トインビーの歴史観、2 ロストウの経済史観、3 近代化論、4 世界史の上からみた日本の文明)【国立教育会館編『現代教養講座』第5巻(ぎょうせい、1977年)収録]

戦後二十年の政治力学/朝日新聞安保特集批判/「戦後」の意味/日本における「文化大革命」問題点/現代の神話・バリ＝コンミュン『戦後日本の思想と政治』<時評集>関嘉彦共著<自由選書>自由社、1971年3月15日

ドイツ帝国の成立とビスマルク時代『近代世界の展開 IV』<岩波講座世界歴史 20 近代 7>岩波書店、1971年6月18日【『ドイツ史論集』『ドイツ史論文集』<林健太郎著作集第2巻>収録】<果図

歴史の真の魅力を知るために[「ホイジンガ選集を推薦する」]『ホイジンガ選集 全6巻 内容見本』河出書房新社、1971年

戦後日本の思想界におけるマルクス主義『悲劇は始まっている』漆山成美編、高木書房、1972年11月5日

はしがき『男と女』<東京大学公開講座 18>東京大学出版会、1974年1月20日

はしがき『エネルギー』<東京大学公開講座 19>東京大学出版会、1974年10月30日

マイネッケ史学の魅力『世界の名著 54 マイネッケ 付録 39』中央公論社、1974年12月20日[対談：高坂正堯]

はじめに／総説(10 近代歴史学の成立、11 ナショナルリズムと歴史学、12 近代歴史学の発展、13 現代歴史学の諸傾向)／第5章十九世紀－歴史の世紀 概説『原典による歴史学の歩み(原典による学術史)』澤田昭夫共編著、講談社、1974年11月12日 [改題『原典による歴史学入門』<講談社学術文庫>講談社、1982年3月10日]

ランケの人と学問『世界の名著 続 11 ランケ』<編>中央公論社、1974年12月20日[<中公バックス>1980年][「レオポルト・フォン・ランケの人と学問」と改題『ドイツ史論集』、「近代歴史学の父レオポルト・フォン・ランケ」と改題『歴史学と歴史理論』<林健太郎著作集第1巻>収録]

ランケ神学の神髄『世界の名著 続 11 ランケ 付録 7』中央公論社、1974年12月20日[対談：鈴木成高]

はしがき『アジアのなかの日本』<東京大学公開講座 20>東京大学出版会、1975年3月25日

歴史思い出すまま『歴史学研究戦前期復刻版 11 月報』1975年6月【『赤門うちそと』収録]

はしがき『天災と人災』<東京大学公開講座 21>東京大学出版会、1975年10月20日

今後の日本の教育『今後の日本の教育 漱石と現代 特別講座講演集』山口県教育財団編・刊、1975年10月30日[加筆訂正して「戦後教育の反省」と題して『歴史と精神』収録]

野球と私『東京大学野球部史』都築俊三郎編、一誠会、1975年11月【『赤門うちそと』収録]

歴史像と歴史叙述『東西文化比較研究 歴史像の東西』日本文化会議編、研究社出版、1976年1月20日 [司会：源了円、講演：芳賀徹、コメント：ドナルドキーン、自由討論：林健太郎、芳賀徹、佐伯彰一、鈴木成高、ドナルド・キーン、小堀桂一郎、堀米庸三、渡部昇一、高階秀爾、伊東俊太郎、西尾幹二、角田順]

ヨーロッパにおける歴史主義と反歴史主義『東西文化比較研究 歴史像の東西』日本文化会議編、研究社出版、1976年1月20日 [司会：渡部昇一、講演：西尾幹二、コメント：木村尚三郎、自由討論：林健太郎、鈴木成高、堀米庸三、伊東俊太郎、佐伯彰一、木村尚三郎、碧海純一、小堀桂一郎、川勝義雄、源了円、川原栄峰、鈴木重信、芳賀徹、植村清二、村松暎、藤井隆、高階秀爾、筑波常治]

歴史のなかの「私」『東西文化比較研究 歴史像の東西』日本文化会議編、研究社出版、1976年1月20日  
[司会：小堀桂一郎、講演：佐伯彰一、コメント：堀米庸三、自由討論：林健太郎、堀米庸三、佐伯彰一、西尾幹二、藤井隆、高階秀爾、鈴木重信、芳賀徹、角田順、川勝義雄、植村清二、鈴木成高]

西洋における自由の系譜『日本人は自由か』日本文化会議編、紀伊国屋書店、1976年2月15日[討論：志水速雄、木村尚三郎、公文俊平、佐藤誠三郎、渡辺昭夫、高坂正堯、鈴木重信、野田宣雄、碧海純一、勝田吉太郎、会田雄次]

自由とは何か『日本人は自由か』日本文化会議編、紀伊国屋書店、1976年2月15日[討論：芳賀徹、勝田吉太郎、鈴木重信、佐藤誠三郎、関嘉彦、野田宣雄、渡辺昭夫、会田雄次、入江昭、高坂正堯、公文俊平、志水速雄、村上泰亮]

はしがき『酒』<東京大学公開講座 22>東京大学出版会、1976年5月25日

はしがき『水』<東京大学公開講座 23>東京大学出版会、1976年10月30日

はしがき『地震』<東京大学公開講座 24>東京大学出版会、1976年11月15日

\*世界史からみた日本『正しい皇室観 天皇陛下御在位五十年記念特別講演集』特別講演集編集委員会編・刊、1977年

ロシア革命『革命の研究』<編著>高木書房、1978年4月24日[座談会：内村剛介、勝田吉太郎、志水速雄、猪木正道]

世界の中の日本文化『1980年代の情勢と日本の防衛—防衛開眼第四集—』<1978年2月23・24日隊友会主催・防衛庁後援第4回防衛トップセミナー講演・討論集>隊友会、1978年9月1日

すべて亡妻のアイディアで『私の書齋 3』竹井出版編・刊、1979年9月15日

ヨーロッパ都市の歴史的考察『東西文化比較研究 文化と国土設計』日本文化会議編、PHP 研究所、1978年11月30日

ヨーロッパ都市の歴史的考察『東西文化比較研究 文化と国土設計』日本文化会議編、PHP 研究所、1978年11月30日[討論：野田宣雄(司会)、本間長世(コメント)、小松左京、会田雄次、佐伯彰一、田中美知太郎、小堀桂一郎、芳賀徹、高坂正堯、山崎正和、飯田経夫、松原治郎、竹内靖雄]

歴史の連続性[1979年3月9日講演]『NHK文化講演会 2』NHK 編、日本放送出版協会、1980年1月20日

戦後日本の知識人とマルクス主義『日本の知識人—その系譜と役割—』日本文化会議編、PHP 研究所、1980年7月31日[自由討論：粕谷一希(問題提起)、志水速雄(コメント)、芳賀徹(司会)、高根正昭、村松剛、関嘉彦、佐伯彰一、村松暎、入江隆則、渡部昇一、山本七平、田中美知太郎]

歴史および歴史観の諸問題[「現代民主主義の哲学的基礎」]『思想』<大系民主社会主義 第1巻>民主社会主義研究会編、文芸春秋、1980年8月31日

解題『都市の発達史—近世における繁栄中心の移動—』今井登志喜著、誠堂新光社、1980年11月25日[加筆して「今井登志喜と日本の歴史学」と題して『今井登志喜』(諏訪史談会、1984年)収録]

ジャパン・スタイル展を終えて[巻頭言]『ジャパン・スタイル展 その記録と反響』国際交流基金、1981年2月10日

世界の中の日本『伝統と未来』<'80 八戸市民大学講座講演集—東奥賞受賞記念号>八戸市教育委員会、1981年3月1日

岩崎さんと私『岩崎武雄著作集 月報 2』新地書房、1981年10月

一筋の道『道 昭和の一人—話集 2』中統教育図書、1981年12月22日[『わが師わが旅』収録]

- \*[推薦文]『明治維新人名辞典 内容見本』吉川弘文館、1981年  
 瑞々しい感受性[「推薦の言葉」]『竹山道雄著作集 内容見本』福武書店、[1982年]  
 解説『昭和の精神史』<竹山道雄著作集第1巻>福武書店、1983年3月20日
- \*[推薦文]『田中美知太郎全集 増補決定版 内容見本』筑摩書房、1987年  
 清水幾太郎氏の読書と人生『清水幾太郎著作集 [月報]6』講談社、1992年8月  
 時代の社会現象を解明した、すぐれた昭和史の分析的記録[「推薦のことば」]『清水幾太郎著作集 内容見本』講談社、1992年
- \*[推薦文]『勝田吉太郎著作集 内容見本』ミネルヴァ書房、1992年  
 巨漢吉葉山、宙に舞う『大相撲この一番 “通”が選ぶ思い出の名勝負集』同文書院、1994年3月4日  
 公正の論理と倫理の回復[「戦後五十年」とは何だったのか]『日本の論点'95』文芸春秋、1994年11月10日[「戦後五十年の反省」収録]  
 日本国憲法をどう考えるか 連立政権のはらむ危機『日本の境位を探る』日本有権者連盟編、四谷ラウンド、1995年10月20日
- \*[推薦文]『世界の歴史 内容見本』中央公論社、1996年  
 まえがき／はるか彼方から呼ぶ声『泉は涸れずー丸山勝廣と群馬交響楽団ー』林健太郎・辻村明共編、毎日新聞社、1998年12月10日  
 駒場で暮した頃『春尚浅きー敗戦から甦る一高』一高23年文集の会編・刊、1999年4月22日  
 [「編集委員八人の独白」]『二十一世紀への提言 エルゴー会命名 80年記念論集』慶応義塾大学弁論部エルゴー会、2000年4月20日  
 実存的存在ー民族・文化の自己表現としての国家[「国家とは何か」]『日本再考』<構想日本 1>構想日本 J.I.フォーラム編、水曜社、2005年10月28日

### III 訳書

三十年戦争史第一巻『歴史』<シラー選集 3>新関良三編、富山房、1942年2月15日

ドイツ国民史のために／ドイツ統一戦争に際して『小論集』<ランケ選集 6>小林栄三郎・村岡哲・板倉勝正共訳、三省堂、1942年12月31日

反省／ドイツ就中プロイセンの商業政策の歴史のために／「一信者の言葉」について『十九世紀ドイツ・フランス史』<ランケ選集 4>堀米庸三・小林栄三郎・讃井鉄男・村岡哲共訳、三省堂、1943年7月30日

偉大なる戦の回顧[ハインリヒ・フォン・トライチュケ著]『独逸大学の精神』フリッツ・シュトリヒ編、高山書院、1944年1月20日

自伝『世界史論進講録 時代の動因 自伝』<ランケ選集 7>村川堅固・西村貞二共訳、三省堂、1946年5月20日[改訳新版『ランケ自伝』<岩波文庫>岩波書店、1966年10月16日、「解説」を付す。「解説」を除き『歴史学と歴史理論』<林健太郎著作集第1巻>収録]

ドイツ就中プロイセンの商業政策の歴史のために『十九世紀ドイツフランス史』<ランケ選集 1>堀米庸三・讃井哲男共訳、千代田書房、1948年3月15日印刷

『英国社会史 チョーサーよりヴィクトリア女王まで六世紀間の眺望』<監修>上・中・下巻、G.M.トレヴェリアン著、山川出版社、1949年12月10日、1950年6月7日、10月20日

『イギリス労働運動史』I、II、III<岩波現代叢書>G.D.H.コール著、河上民雄・嘉治元郎共訳、岩波書店、1952年1月25日、1953年1月25日、1957年8月8日

『近代史学史』上・下、G.P.グーチ著、林孝子共訳、吉川弘文館、1955年10月20日、1960年9月10日[下巻巻末に「G.P.グーチ博士とその業績」を付す。『歴史と政治』収録][改題新版『十九世紀の歴史と歴史家たち』上・下<筑摩叢書>筑摩書房、1971年7月15日、1974年1月25日、「G.P.グーチ博士とその業績」を「訳者あとがき」と題して上巻巻末に付す]

ドイツにおける革命と反革命(エンゲルス著、岡茂男・佐藤進共訳)『革命と反革命』<マルクス・エンゲルス選集 6>新潮社、1956年5月30日

『第二次世界戦争前史 1939年夏の国際関係』ヴァルター・ホーフアー 著、斎藤孝共訳、御茶の水書房、1958年9月10日

『ルイ十五世 ブルボン王朝の衰亡』G.P.グーチ著、中央公論社、1994年12月20日[「訳者あとがき」を付す]



#### IV 監修

- 『菊池寛全集』全 24 巻、高松市菊池寛記念館、1993～1995 年[第 24 巻(1995 年 8 月 30 日)に「時代の体現者・菊池寛」を執筆]
- 『世界の歴史』全 24 巻・別巻、河出書房、1968～1972 年[新装版：河出書房新社、1973～1974 年、<河出文庫>河出書房新社、1989～1990 年]
- 『冒険者たちの世界史 ラールズ版・劇画』全 24 巻、ミシェル・ド・フランス 編、榊原晃三訳、タイムライフブックス、1981 年
- 『竹山道雄著作集』全 8 巻、福武書店、1983 年[第 1 巻(1983 年 3 月 20 日)に「解説」を執筆]
- 『実録昭和史 激動の軌跡』全 7 巻、ぎょうせい、1987 年 3 月 1 日～9 月 30 日[第 7 巻に「巻頭言」を執筆]
- 『天皇の昭和史 実録昭和史・激動の軌跡』塚田義明責任編集、ぎょうせい、1988 年 5 月 1 日
- 『新天皇陛下 平和と繁栄を願って平成を拓かれる』塚田義明著、ぎょうせい、1990 年 1 月 20 日

#### V 教科書

- 『世界史概観』史学会編、村川堅太郎・山本達郎共編著、山川出版社、1949 年 4 月 15 日[復刻版『世界史概観』2019 年]
- 『世界史』史学会編、村川堅太郎・江上波夫共著、山川出版社[改訂版：1952 年 3 月 5 日、新版：1982 年 3 月]
- 『世界の発展 新訂』<中学社会科>林健太郎著、二葉、1956 年
- 『詳説世界史』村川堅太郎・江上波夫共著、山川出版社、1959 年 3 月[改訂版：1966 年、再訂版：1969 年、新版：1972 年]
- 『詳説世界史 教授資料』村川堅太郎・江上波夫共著、山川出版社、1959 年[改訂版：1966 年、再訂版：1969 年、新版：1972 年]
- 『詳説世界史 世界史 B』江上波夫・山本達郎・成瀬治共著、山川出版社、1994 年[改訂版、2002 年]
- 『標準世界史』村川堅太郎・江上波夫・山本達郎[ほか]共著、山川出版社、1988 年 3 月
- 『要説世界史』村川堅太郎・江上波夫・山本達郎[ほか]共著、山川出版社[新版：1983 年 3 月、再訂版：1989 年 3 月、[[改訂]要説世界史 世界史 A]江上波夫・山本達郎・林健太郎・成瀬治著、山川出版社、1999 年 3 月 5 日]
- 『世界史年表・地図』亀井高孝・三上次男・堀米庸三共編、吉川弘文館、1995 年 4 月 1 日[第 26 版：2020 年]

## VI 論文・評論・随筆等(新聞・雑誌掲載)<1015 篇>

### 1935 (昭和 10) 年

二つの史学[「史学時評」]『帝国大学新聞』577、5月13日

ゾムバルトの近況[「史学時評」]『帝国大学新聞』584、7月1日

フリードリッヒ・マイネッケ『歴史学研究』4-4~6[22~24]、8月1日、9月1日、10月1日

一九一三年のドイツの教訓『改造』17-10、10月1日<今井登志喜>[代筆]

### 1936 (昭和 11) 年

最近の概説書を通じて見たる我国西洋史学界の動向『歴史学研究』6-2[28]、2月1日<西洋史部会>

ヒストリッシュェ、ツァイトシュリフト第百五十三巻の巻頭言『歴史学研究』6-3[29]、3月1日<S・H生>

「最近の概説書を通じて見たる我国西洋史学界の動向」訂正並びに正誤[「会報」]『歴史学研究』6-3[29]、3月1日<無署名>

海外学術雑誌展望 史学[「書評」]『帝国大学新聞』624、5月4日

凋落途上のドイツ学術 S・B・フエイ[「資料」]『歴史学研究』6-7[33]、7月1日<平川生>

イタリーの歴史教育『歴史学研究』6-8[34]、8月1日<牟田口亘>

「嵐の中の」歴史学『歴史学研究』6-9[35]、9月1日<平川省三>

### 1937 (昭和 12) 年

ドイツにおける反対党『歴史学研究』7-2[40]、2月1日<安達謙>

モロッコ[「回顧と展望」]『歴史学研究』7-2[40]、2月1日<翠川進>

ビスマルクの政治思想の歴史的考察『史学雑誌』48-3、4、3月1日、4月1日[「ビスマルクの国民思想について」と改題『独逸近世史研究』、「ビスマルクとドイツ統一思想」と改題『プロイセン・ドイツ史研究』、『ドイツ史論文集』<林健太郎著作集第2巻>]

世界大戦とドイツの学者たち[「回顧と展望」]『歴史学研究』7-6[44]、6月1日<梶光之介>

ビスマルク的転回『文芸春秋』15-14、11月1日<今井登志喜>[代筆]

村岡哲『啓蒙専制政治』の構造[「紹介と批判」]『歴史学研究』7-12[49]、12月1日

### 1938 (昭和 13) 年

マイネッケ「歴史主義の発生」について—チャールズ・A・ビアドによるその紹介と批判—『歴史学研究』8-1[50]、1月1日

プロイセン憲法闘争と Koalitionsfrage[「歴史学研究会第一回大会記」]『歴史学研究』8-2[51]、2月1日

昨年度の歴史学界 三、西洋史[「紹介と批判」]『歴史学研究』8-2[51]、2月1日<K・H>

大ドイツ国の建設『日本評論』13-5、5月1日<今井登志喜>[代筆]

昭和十二年度に於ける我国西洋史学界の状況[「雑録」]『史学雑誌』49-6、6月1日

ビスマルクとラッサール『歴史学研究』8-8,9[57,58]、8月1日、9月1日[『独逸近世史研究』『ドイツ史論集』、「ビスマルクとラッサールの会談について」と改題『ドイツ史論文集』<林健太郎著作集第2巻>収録]

十九世紀の決定版 斎藤清太郎氏の新著「西洋近世史講話(前篇)」[「書評」]『帝国大学新聞』731、9月12日

### 1939 (昭和 14) 年

ビスマルクとヒトラー—その政治的手腕と活躍舞台—『知性』2-6、6月1日<今井登志喜>[代筆]

鹿島守之助著『ビスマルクの外交政策』[「書評」]『史学雑誌』50-8、8月1日<林>

### 1940 (昭和 15) 年

日本史学の黎明[「回顧と展望 社会科学 史学」]『帝国大学新聞』792、1月1日

鈴木成高著「ランケと世界史学」[「紹介と批判」]『歴史学研究』10-3[75]、3月1日

ドイツの文化『形成』5、4月1日

西洋史編総論『歴史学研究』10-4[76]、4月1日

ドイツ保守主義—思想的試論[1939年11月25日講演(於歴史学研究会大会)を補正]『歴史学研究』10-6,8[78,80]、6月1日、8月1日[「ドイツ保守主義小論」と改題『独逸近世史研究』収録]

参考:「会報西洋史部会報告」中の研究発表(4月23日例会於学士会館)「独逸浪漫主義に関する諸見解」要旨『歴史学研究』10-6[78]、6月1日

歴史観と歴史教育『教育』8-7、7月1日

### 1941 (昭和 16) 年

西洋史篇 近世史(下)『歴史学研究』11-4・5[88]<歴史学年報—昭和十五年度—>5月1日<岩田徹・矢田俊隆・岩永博・村瀬興雄連名>

生れ出づる悩み 史学会西洋史部会を中心に[「時評 西洋史学」]『帝国大学新聞』859、6月2日

編輯後記『歴史学研究』91、9月1日<林>

ランケ復興の意味[「文化指標」]『改造』23-19、10月1日[『歴史と現代』収録]

最近のフリードリヒ・マイネッケ『歴史学研究』92、10月1日[「フリードリヒ・マイネッケ小論」と改題『歴史と現代』収録]

編輯後記『歴史学研究』92、10月1日<林>

鈴木正四著「セシル・ローズと南アフリカ」[「紹介と批判」]『歴史学研究』93、11月1日

編輯後記『歴史学研究』93、11月1日<林>

学界の鳥瞰図 西洋史論叢『政治と思想』[「書評」]『帝国大学新聞』877、11月10日

編輯後記『歴史学研究』94、12月1日<林>

## 1942 (昭和 17) 年

- 鈴木成高著「歴史的国家の理念」[「紹介と批判」]『歴史学研究』97、3月1日  
英国没落の歴史的基礎[「文芸」]『都新聞』4月14～23日  
編輯後記『歴史学研究』101、7月1日<<林>>  
歴史家の職域[「知識人の職場」]『知性』5-8、8月1日  
スペンダー著中村祐吉訳「英国現代史」『歴史学研究』102、8月1日  
堅実なる歩み 学的水準を如何に維持するか[「歴史学」]『一橋新聞』352、8月10日  
歴史家の立場『中央公論』57-12<大東亜戦争一周年号>、12月1日[『歴史と現代』収録]  
編輯後記『歴史学研究』105、12月1日<<林>>

## 1943 (昭和 18) 年

- 史学史への関心 抬頭するフランス史学[「時評 歴史学」]『帝国大学新聞』929、1月11日  
示唆多き啓蒙の書 マイネッケ著中山治一訳『歴史主義の立場』『一橋新聞』360、1月25日  
息吹く”過去の面影” G.フライターク向坂逸郎氏訳『独逸文化史』(一)『帝国大学新聞』952、7月5日  
マイネッケ著矢田俊隆訳「独逸国民国家発生の研究」[「紹介と批判」]『歴史学研究』112、8月1日  
ドイツ現代史ピエール・ペナエルト著西海太郎訳[「新著概観」]『歴史学研究』112、8月1日  
近代世界史講話ヘイス・ムーン共著高木健太郎訳[「新著概観」]『歴史学研究』114、10月1日  
権俊雄著「歴史的意識」[「紹介と批判」]『歴史学研究』115、11月1日

## 1944 (昭和 19) 年

- 編輯後記『歴史学研究』117、1月1日<<林>>  
ヨハンネス・ハラ著島田雄次郎訳「ドイツ史概観」ディルタイ著村岡哲訳「フリードリヒ大王とドイツ啓蒙主義」G・P・グーチ著柴田明德訳「ドイツとフランス革命」『歴史学研究』118、2月1日  
「西洋史研究」第一輯[「紹介と書評」]『史学雑誌』55-3、3月1日

## 1945 (昭和 20) 年

- 「世界の進運」とは『東京新聞』9月22、23日

## 1946 (昭和 21) 年

- 『実証』の再検討—新たな歴史家の課題について—[「学界の課題と展望 史学」]『大学新聞』48、1月1日[「歴史学に於ける「実証」の意義」と改題『歴史と現代』収録]  
西洋史 独立した史学の確立 国際的な学問の興隆を望む[「再建歴史学の課題」]『日本読書新聞』333、1月1日  
世界史の転換『世界文化』1-1、2月1日  
歴史認識の新段階[「特輯新文化発足への省察と展望」]『思潮』1-1、3月1日[「新しき歴史理論の方法」と

改題『歴史と現代』収録]

政治と歴史学ードイツ史学の課題ー『世界』3、3月1日[『歴史と現代』収録]

歴史学に於ける科学性と芸術性『人間』1-3、3月1日[「歴史学の科学性と芸術性」と改題『歴史と現代』収録]

ヒューマンイズムの歴史『大学新聞』56、57、4月1、11日[帝国大学新聞社編『再建の指標』<学徒叢書>(勤労学徒援護会、1946年10月20日)収録、「ヒューマンイズムの歴史と課題」と改題『歴史と現代』収録]

自由の探求『新生』2-5、5月1日[『歴史と現代』収録]

歴史学革新の前提ー「史実」の意義に関連してー『新歴史』1、6月1日[『歴史と現代』収録]

問題提起に意義 アメリカの明晰さ[「Emery Reves の平和の解剖学 The anatomy of peace を読みて」『日本読書新聞』349、6月12日]

ある知識人の悲劇『評論』5、7月1日[「ゲオルク・フォルスターの悲劇」と改題『人間と思想の歴史』『歴史と人間像』収録]

二年間『黄蜂』2、8月5日]

一兵士の物語[翻訳]『饗宴』3、8月20日[『人間と思想の歴史』『近代史の諸相』収録]

官僚制度の本質と課題『世界』9、9月1日[「官僚制度の史的考察」と改題『歴史と現代』収録]

独善主義者の悲哀『展望』10、10月1日[「啓蒙専制政治の思想」と改題『人間と思想の歴史』、「フリードリヒ大王」と改題『近代史の諸相』『歴史と人間像』収録]

三人の貴族の生涯ーフランス革命挿話ー『世界文化』1-10、11月1日[「三人のドイツ人」と改題『人間と思想の歴史』、「フランス革命と三人のドイツ人」と改題『歴史と人間像』収録]

人間マルクスの生成『人間』1-11、11月1日[『近代精神』<人間選書 5>(鎌倉文庫編・刊、1949年)、「若きマルクス」と改題『人間と思想の歴史』『近代史の諸相』『歴史と人間像』収録]

うそ[「ずるひつ」]『文化展望』1-6、11月1日]

タナカ・メモランダム [『新世代』1-4、12月1日に掲載予定であったが、GHQの事前検閲により掲載禁止となった。校正刷はブラング文庫所蔵]

## 1947 (昭和 22) 年

二十代の特権ーO君への手紙ー『社会』2-1、1月1日]

絶対主義について『歴史学研究』125、1月20日]

科学的歴史学への途『人文』1-1、3月1日]

歴史に於ける主体の問題『世界』16、4月1日[臼井吉見監修『戦後文学論争 上巻』(番町書房、1972年)収録]

「絶体主義について」自己批判[「論文批判」]『歴史学研究』127、5月20日]

[「執筆者通信 一、近刊のもの 二、執筆中のもの」]『日本読書新聞』402、7月23日]

オポチュニストとドクトリネア[「オポチュニズムと日本人」]『文芸春秋』25-7、8月1日]

歴史類型論の問題性 高橋幸八郎著「近代社会成立史論」『書評』2-6、9月1日]

歴史学の方法論についていわゆる大塚史学をめぐって『潮流』2-8、10月1日[座談会：服部之総、高橋幸八郎、内田義彦、松本新八郎]

\*中国の留学生『橄欖』＜中華留日一高同学会＞1-2、9月[『個性の尊重』収録]

唯物史観とドイツ革命—ゲオルグ・フォン・ペロウのマルクス批判—『唯物史観』1、11月15日

実力・難解・晦渋[「怖るべき本たち」]『日本読書新聞』418、11月19日

\*或る売笑婦の話『ナンバーワン』臨時号、11月

現代学生論『光』3-12、12月1日

## 1948 (昭和23) 年

近代の意味『進路』3-1、1月1日

マルクス主義と自由の問題『東京大学新聞』1054・1055、1月1日

ミラボーの「プロシア王国」『評論』17、1月1日[『人間と思想の歴史』『近代史の諸相』『歴史と体験』収録]

ゲーテとシュタイン『思想』283、1月20日[『人間と思想の歴史』『近代史の諸相』『歴史と人間像』『歴史と体験』収録]

一つの記録—プロイセン官吏の手記—『玄想』2-2、2月1日[「敗戦国官吏の手記」と改題『人間と思想の歴史』『近代史の諸相』収録]

新しい公式主義の危険—西洋史学界の展望[「学界展望 歴史学」]『社会』3-2、2月1日

尾鍋輝彦著西洋史概説上巻[「書評」]『人文』2-1、2月1日

唯物史観と主体性『世界』26、2月1日[座談会：清水幾太郎、松村一人、古在由重、丸山真男、真下信一、宮城音彌][吉野源三郎編『原点「戦後」とその問題』(評論社、1969年)、『近代主義』＜現代日本思想大系34＞(筑摩書房、1964年)、『丸山真男座談1 一九四六—一九四九年』(岩波書店、1998年)収録]

唯物史観の前進のために 服部之総「歴史論」評[「書評」]『書評』3-4、4月1日

新入生諸君に 懐疑から真理へ『東京大学新聞』1067、4月8日

西洋近世史の根本問題—大塚史学再論—『唯物史観』2、4月15日

デモクラシーの歴史について[講演抄録・文責在記者「特集組合民主化運動」]『巨歩』3-2、6月22日

真の文化のために[「知詩人戦線」]『個性』1-7、7月1日

うそとまこと『新生』1-7、7月1日

寸言集『文芸春秋』26-7、7月1日<<中野好夫・林健太郎・渡邊慧>>

寸言集『文芸春秋』26-8、8月1日<<中野好夫・林健太郎・渡邊慧>>

妻の自由と幸福のために『婦人公論』[32]-8、8月1日[座談会：寺田竹雄、鈴木重雄、浦辺史、稲村耕雄]

『青白き世界』の超克—知識階級の転落と成長—『光』4-9、9月1日

寸言集『文芸春秋』26-9、9月1日<<中野好夫・林健太郎・渡邊慧>>

不当な結びつけ 現実と”古典”との比較は問題[「展望 和辻哲郎「国民全体性の表現者」(「心」八月号)について]『日本読書新聞』457、9月15日

寸言集『文芸春秋』26-10、10月1日<<中野好夫・林健太郎・渡邊慧>>

「白」と「黒」[「学芸」]『朝日新聞』10月3日

寸言集『文芸春秋』26-11、11月1日<<中野好夫・林健太郎・渡邊慧>>

西洋史物語文庫 “歴史を面白く読ませる” 構想と叙述に不備のうらみ『日本読書新聞』465、11月10日

「二十代」と道義『婦人文庫』3-11、12月1日

寸言集『文芸春秋』26-12、12月1日<<中野好夫・林健太郎・渡邊慧>>

## 1949 (昭和 24) 年

寸言集『文芸春秋』27-1、1月1日<<中野好夫・林健太郎・渡邊慧>>

[「最近何をお読みになられましたか 良書にかぎらず読後失望されたような本についても御回答ください」]『書評』4-1、1月1日

チャーチルの「大戦回顧録」について『人間』4-1、1月1日

今井登志喜著英国社会史一書評一『読書展望』4-2、1月10日

唯物史観の試練『展望』38、2月1日

ヒューマンイズムの体現者—我が影響を受けた人—『文芸春秋』27-2、2月1日[「影響を受けた人」と改題  
『個性の尊重』収録]

最近の歴史書 出始めた堅実な研究[「学芸」]『朝日新聞』2月27日

変革期に於ける处世哲学 出世に就て『自由国民』19、3月10日

倦まざる精進の跡—増田四郎著「ヨーロッパ社会の誕生」『読書倶楽部』4-5、6月1日

大学法と学生運動『人間』4-6、6月1日

プロイセン改革の理念[論説]『史学雑誌』58-1、2、6月25日、7月25日[「プロイセン農民解放の性格」  
と改題『近代ドイツの政治と社会』『ドイツ史論集』収録]

[「私の愛読書」]『表現』2-6、7月1日

私と小説『文学界』3-5、7月1日

西洋史『人文』特集号、7月20日

[「執筆者通信」]『日本読書新聞』508、9月14日

トレヴェリアン「英国社会史」[「あるびよん・らいぶらりい」]『あるびよん』1-2、10月5日

ワイマール共和国の歴史 かえりみるべき「この薄倖なる生涯」『図書新聞』15、10月11日

水兵になつた頃『思想の科学』5-1、10月15日

講和の方向『展望』48、12月1日[座談会：林健太郎(司会)、細川嘉六、鈴木文史朗、向坂逸郎、横田喜三郎]

## 1950 (昭和 25) 年

象皮病『文芸春秋』28-1、1月1日

分担執筆に成功 その名の如く学徒必携の書[一橋大学新聞部編『経済学研究の葉 西洋経済史篇』の書評]『日本読書新聞』527、2月1日

好意と共感[「コミンフォルムと日本共産党」]『展望』51、3月1日

今井登志喜先生のこと『心』3-5、5月1日[『個性の尊重』収録]

学内細胞 感傷的なヒロイズム[「学芸」]『朝日新聞』5月28日

共産主義とたゞかう学説 主観を殺して忠実に紹介している態度がいゝ『図書新聞』48、6月7日

コニヤーズ・リード「歴史家の社会的責任」[「海外史界」]『史学雑誌』59-6、6月20日

今井登志喜先生のこと『信濃』2-6、6月20日

神川彦松著『近代国際政治史』[「書評」]『史学雑誌』59-7、7月20日

学生運動について 大学の内外『前進』37、8月1日

世界史の年表について[「学校図書館」]『日本読書新聞』553、8月2日

[「出版界・この五年 収穫」]『日本読書新聞』555、8月16日

レオポルド・シュヴァルツシルト著龍口直太郎訳「人間マルクス」[「書評」]『書物』5、9月1日

現代知識人の良識—丸山真男氏に対する非批判的批判—『世界』58、10月1日

現代アメリカ史学界の理論的傾向[「世界の学界」]『思想』316、10月15日

気になる社交性 史学会の在り方『東京大学学生新聞』66、11月30日

学生はなぜストをしたがるか『文芸春秋』28-16、12月1日

## 1951 (昭和 26) 年

学生と革命—一八四八年の一エピソード—『世界』62、2月1日[『近代史の諸相』『歴史と人間像』『歴史と体験』収録]

堅実な「史学雑誌」野党色の強い「歴史学研究」『図書新聞』87、3月19日

東北大学西洋史研究室編「西洋文化史論大系」巻一[「書評」]『史学雑誌』60-3、3月20日

清水幾多郎著私の社会観[「ハガキ書評」]『出版ニュース』160、4月21日

清水幾太郎「私の社会観」—創元社刊『人間』6-5、5月1日

自由とはなにか 正体を捉えた鋭い手腕 ビュアリとラスキの歴史的考察『図書新聞』99、6月11日

[「解放文化人への世論」]『図書新聞』100、6月18日

ドイツに於ける社会主義運動史研究の回顧—グスタフ・マイアーの業績に関連して[「学界回顧」]『史学雑誌』60-6、6月20日

スウィージー、及びドップ高橋幸八郎氏の所論の紹介と批判『思想』325、7月5日

三月革命と社会主義『西洋史学』11、10月20日[『現代社会主義の再検討』『歴史と体験』、『ドイツ史論集』「一八四八—一九九年革命と社会主義」と改題『ドイツ史論文集』収録]



講和論をめぐって—総合雑誌評—『朝日新聞』10月21日

再軍備論議など—総合雑誌評—『朝日新聞』11月26日

社会主義社会における自由—アメリカ学者の討論に対する感想『思想』330、12月5日

尾を引く講和論争—新年号の総合雑誌から—『朝日新聞』12月22日

## 1952 (昭和 27) 年

R.シュターデルマン著「1848年革命の社会政治史」[「批評と紹介」]『史学雑誌』61-1、1月20日[「一八四八年革命の百年」]『ドイツ史論集』収録]

アメリカ的な学問[「時評」]『朝日新聞』2月1日

二つの中国[「時評」]『朝日新聞』2月22日

知識階級の役割『文芸春秋』30-4、3月1日

学術書の出版[「時評」]『朝日新聞』3月13日

西洋史学入門[「わが著書を語る」]『出版ニュース』193、3月21日

プロイセン改革とフランス革命『史学研究』復刊 9[47]、3月30日[「近代ドイツの政治と社会」]『ドイツ史論集』『ドイツ史論文集』収録]

復古調ということについて[「四つの声」]『文芸』9-4、4月1日

難しいのはこれから[「時評」]『朝日新聞』4月4日

お目出たくない[「時評」]『朝日新聞』4月28日

マルクス主義の歴史性と現代性『心』5-5、5月1日[「唯物史観の歴史性」と改題]『歴史と人間像』収録]

マルクス・エンゲルスと民族問題『思想』335、5月5日[「歴史と体験』収録]

大学出版部の確立 学術書出版に提案[「学芸」]『[大阪]朝日新聞』5月10日

知識階級の離反[「時評」]『朝日新聞』5月19日

トインビー著、深瀬基寛訳「試練に立つ文明」[「書評」]『朝日新聞』5月29日

極めて熾烈な指弾 対馬忠行著『スターリン主義の批判』『日本読書新聞』648、6月11日

五・一五事件の回顧[「時評」]『朝日新聞』6月18日

再び「社会主義社会における自由」について『思想』338、7月5日

員数主義[「時評」]『朝日新聞』7月14日

出版という名の冒険『出版ニュース』206、8月1日

中屋健一著「米国史入門研究」[「書評」]『読売新聞』8月6日

回想録の整理[「時評」]『朝日新聞』8月13日

戦争と平和 猪木イズムの普及本[「猪木政道氏の二つの新著」]『日本読書新聞』659、8月27日

『政策』の選挙[「時評」]『朝日新聞』8月30日

近代ドイツの政治と社会[「わが著書を語る」]『出版ニュース』209、9月1日

歴史はくり返すかー戦争と平和 対立する二大陣営ー『随筆』1-9、9月1日  
棄権の社会学[「時評」]『朝日新聞』9月27日  
教師に余暇を[「時評」]『朝日新聞』10月21日  
勉強する共産党？[「一言」]『朝日新聞』11月14日  
大学院の単位制度[「一言」]『朝日新聞』12月2日  
政治学的方法の導入 丸山教授のフアシズム論について『東京大学学生新聞』141、12月4日  
六・三制のアクセサリー『毎日新聞』12月19日  
正しい歴史の知識[「一言」]『朝日新聞』12月28日

### 1953 (昭和 28) 年

思想と行動『新潮』50-1、1月1日[座談会：竹山道雄、堀田善衛]  
匿名批評の自粛[「一言」]『朝日新聞』1月15日  
私のすすめる教養書『朝日新聞』1月26日  
スターリンの伝記[「一言」]『朝日新聞』2月8日、  
紀要というもの[「一言」]『朝日新聞』3月2日、  
社会党改称すべし[「一言」]『朝日新聞』4月6日  
デモクラシーとナショナリズム『心』6-5、5月1日[『近代史の諸相』『現代社会主義の再検討』収録]  
[「平和の維持に関する意見・批判・希望」]『世界』89、5月1日  
選挙の社会学ー議會を魔物の手に渡してはならぬー『文芸春秋』31-7、5月1日  
平和攻勢の意義[「一言」]『朝日新聞』5月8日  
歴史学の方法の問題 興味深い「実践」の解明がなお不十分[松島栄一編日本歴史講座第一巻歴史理論篇  
『日本読書新聞』708、8月17日  
一八四八 - 四九年のドイツ革命に関する最近の研究[「学界動向」]『史学雑誌』62-10、10月20日[「一八  
四八年革命の百年」『ドイツ史論集』収録]  
史料に魅了された頃[「私の卒業論文」]『東京大学学生新聞』169、10月19日[東京大学学生新聞会編『私  
の卒業論文』(同文館、1956年12月15日)収録、「私の卒業論文」と改題『個性の尊重』収録]  
味気ない仕事ー歴史家と法律家についてー[「学芸」]『毎日新聞』10月31日[「松川事件にちなんで」と改  
題『個性の尊重』収録]  
高校の歴史教育 かえって時間の減る改革案[「論壇」]『朝日新聞』12月9日

### 1954 (昭和 29) 年

ホイットリッジ「危機における人々」[「書評」]『Books of the world』2-6、1月1日  
全人類滅亡の危機 一九五四年の世界[「文化」]『産業経済新聞』1月6日  
ホイットリッジ「危機における人々」[「書評」]『The Youth's companion』8-11、2月

太田氏の拙著批判に答える[「批判と反省」]『歴史学研究』171、5月15日

毎日新聞社編歴史の見方―「世界の歴史」第6巻―生彩ある構成 上原氏根本問題への分析の重み『日本読書新聞』748、5月31日

学問以前のこと[「今日の課題 西洋史の部」]『朝日新聞』7月27日

「現代への不信」の前提[「十人十説 現代への不信」]『知性』1-2、9月1日

東独と西独のマルクス回顧[「世界の学界」]『思想』363、9月5日

戦後ドイツのランケ研究[「学界動向」]『史学雑誌』63-10、10月20日[『ドイツ史論集』収録]

トインビー「世界と西欧」への一反論[書評]『学鏡』51-12、12月5日

## 1955（昭和30）年

寸言葉『文芸春秋』33-1、1月1日<林健太郎・谷口吉郎・吉村正一郎>

思想に食い入る文化史 中島健蔵・山室静編「人間の心の歴史」[「読書」]『読売新聞』1月22日

トインビーの問題『心』8-2、2月1日[「トインビーの史観」と改題『歴史と人間像』、「トインビーの史観について」と改題『歴史と政治』収録]

寸言葉『文芸春秋』33-5、3月1日<林健太郎・谷口吉郎・吉村正一郎>

力による平和と民衆による平和―都留氏の批判に答う―『毎日新聞』9月27日[10月11日付『毎日新聞』掲載文と併せて、「力による平和と民衆による平和」と題して『流れをとらえる』収録]

未知の友人たち 心の友『新潮』52-10、10月1日

世界史の転換をいかに理解するか『中央公論』70-10、10月1日[増補版『明日への歴史』<新潮叢書>（新潮社、1956年）、『流れをとらえる』収録]

都留氏と私の共通点と相違点 - 再び批判に答える - 『毎日新聞』10月11日[9月27日付『毎日新聞』掲載文と併せて、「力による平和と民衆による平和」と題して『流れをとらえる』収録]

日本外交の主脚点―世界史からみた領土問題の考え方―『文芸春秋』33-21、11月1日[「世界史的に見た国境問題」と改題『流れをとらえる』収録]

歴史の事実とその判断―ねず・まさし氏への答によせて―『中央公論』70-12、12月1日[『流れをとらえる』収録]

## 1956（昭和31）年

電車の中でのものを読むな一家の机は何の為にあるのか? - 『文芸春秋』34-1、1月1日

歴史教育について『理想』272<現代歴史教育の問題>、1月1日

現代世界史の展望[「文化」]『東京新聞』1月14~16日【(上) 雪どけはつづくか、(中) 精神を支える力、(下) 楽観に基づく実践】[「雪どけはつづくか」と改題『流れをとらえる』収録]

相当に読んだマル・エン 記憶にのこるナップの芸術論議 [「私の読書遍歴」]『日本読書新聞』834、2月6日[『学生と読書』<現代学生講座3>(河出書房、1956年8月31日)収録、瀬沼茂樹編『若い日の読書―知性の取得と自己形成のために―』<知性選書>(知性社、1958年7月15日)、「私の読書遍歴」と改題『個性の尊重』収録]

大会について[「月報 大会に関する委員会の動き」]『歴史学研究』192、2月15日

西洋史の場合 私はこの五冊を推す[「教養書と私のリスト」]『毎日新聞』2月27日

ソ連は社会主義国でないか『新論』2月[出版社倒産のため未発表、『流れをとらえる』収録]

時流裁断『群像』11-3、3月1日[座談会：亀井勝一郎、福田定良]

歴史学の周辺 象牙の塔に思う『新潮』53-3、3月1日[『流れをとらえる』収録]

変わったこと変らぬこと[「学者の見たソ連の新路線」]『毎日新聞』3月10日[「ソ連におけるスターリン批判」と改題、増補版『明日への歴史』<新潮叢書>(新潮社、1956年)、『流れをとらえる』収録]

武藤光朗著経済倫理[「はがき書評」]『出版ニュース』337、3月21日

歴史と政治—ドイツ史学の場合—[1955年10月21日講演(於熊本大学法文学)]『世界史研究』12、3月31日[『歴史と政治』収録]

時流裁断『群像』11-4、4月1日[座談会：亀井勝一郎、福田定良]

スターリン主義外交への一批判—ねず・まさし氏との論争に関連して[「特別付録 動きつつあるソヴェト」]『中央公論』71-4、4月1日[『流れをとらえる』収録]

酒をぶちまけた話『特集文芸春秋 赤紙一枚で』4月5日[『個性の尊重』収録]

歴史を書くことのむずかしさ 亀井勝一郎氏の「昭和史」批判について[「学芸」]『産経時事[夕刊]』4月16日[「昭和史」論争について]と改題『個性の尊重』収録]

アメリカの戦慄[「知性試写室」]『知性』3-6、5月1日

明快な実証的研究 東独で出版された最高のもの[シルファート著、上杉重二郎・伊東勉共訳『ドイツ三月革命の研究』の書評]『日本読書新聞』851、6月4日

ソ連の変貌—それは民主主義の再生か『世界』127、7月1日[座談会：前芝確三、岡本清一、清水幾多郎][座談会速記録から「スターリン批判の意味」と題して『流れをとらえる』収録]

[「某月某日」]『日本経済新聞』9月15日[「カイロの一日」]『個性の尊重』収録]

ゾンバルトの墓『日本経済新聞』10月17日[『個性の尊重』収録]

トインビー教授の講演『毎日新聞』10月19日[『流れをとらえる』収録]

自由の嵐に揺ぐ東欧『東京新聞』10月26、27日[座談会：原子林二郎、森元次郎][座談会速記録から「東欧の動揺の教えるもの」と題して『流れをとらえる』収録]

国民的利益と階級利益『中央公論』71-12、11月1日[『流れをとらえる』収録]

英国に学ぶべき秩序の感覚—無政府主義横行の日本—『文芸春秋』34-11、11月1日[「イギリスに見る秩序の感覚」と改題『流れをとらえる』収録]

食べ物にされる中東 水と油のイスラエル、アラブ『読売新聞』11月1日

米の”平和擁護”に期待[「力の政策と国連の危機」]『朝日新聞』11月5日[「英仏のスエズ出兵」と題して「スエズ・ハンガリー問題」]『流れをとらえる』収録]

G・P・グーチ博士の近況『学燈』53-11、11月5日[「G.P.グーチ博士訪問」と改題『個性の尊重』収録]

均衡感覚[「読者への手紙」]『週刊新潮』1-40、11月12日[「カイロの一日」]『個性の尊重』収録]

[「月報「歴史学研究」200号刊行によせて」]『歴史学研究』201、11月15日

現代史・一九五六年秋『文芸春秋』34-13<緊急増刊>11月20日[「中近東問題の歴史」と改題『流れをとらえる』収録]

\*カンタベリー・ケルン・ローマ『西洋史通信』11月[『個性の尊重』収録]

敏感さと一貫性に敬意[「サルトル声明」を読んで]『毎日新聞』12月1日[「ハンガリー問題に関するサルトルの声明」と題して「スエズ・ハンガリー問題」『流れをとらえる』収録]

思い出深い東ベルリンの街—この目でみた共産主義の現実—[「一年の総決算」]『日本週報』391、12月15日[加筆して「のぞいて見た東ベルリン」と改題『流れをとらえる』収録]

## 1957（昭和32）年

歴史の大道[「学芸」]『毎日新聞』1月1日[「自由と進歩」『流れをとらえる』収録]

誤れる進歩主義『大阪産業経済新聞』1月4日[「正しい進歩主義の確立のために」と改題「自由と進歩」『流れをとらえる』収録]

三度ねず氏に答える『歴史評論』84、2月1日

無視できない悩み 数は少なくとも本当の人間の...『日本経済新聞』2月22日[「春と教師の悩み」と改題『個性の尊重』収録]

谷崎文学の魅力『中央公論』72-3、3月1日[『個性の尊重』収録]

史的一元論への反省『総合』1-1、5月1日[『流れをとらえる』収録]

見えざる文化人への期待[「往復書簡 政治と文学と歴史の眼」]『短歌研究』14-5、5月1日

総合雑誌と巻頭論文『中央公論』72-6、5月1日[座談会：丸山真男、白井吉見、大河内一男、竹内好、鶴見俊輔]

現代歴史学の根本問題—マルクス主義歴史家への提言—『思想』395、5月5日[「唯物史観歴史学への提言」と改題『現代社会主義の再検討』収録]

史家をだし抜いた”歴史” 亀井勝一郎著『現代史の課題』[「読書」]『週刊東京』3-21、5月25日

過去からの解放—マルクス主義と近代政治学の対立の克服—『中央公論』72-8、6月1日[「マルクス主義と大衆社会論」と改題『現代社会主義の再検討』収録]

上原専禄著世界の見方 強烈な信念の吐露『日本読書新聞』904、6月17日

維新史家への頂門の一針 白杉庄一郎「絶対主義論」[「読書展望」]『中央公論』72-9、7月1日

現代の「神かくし」—いなくなった藤原講師と現代の空白—『文芸春秋』35-7、7月1日

毛沢東の演説[「石筆」]『東京新聞』7月5日[『個性の尊重』収録]

伝統と創造[「石筆」]『東京新聞』7月12日[「金沢と九谷焼」と改題『個性の尊重』収録]

神秘の世界[「石筆」]『東京新聞』7月19日[「若き学者の死」と改題『個性の尊重』収録]

魚返善雄訳著『論語』新訳 満たされた面白さ[「書評」]『出版ニュース』385、7月21日

米国の全学連[「石筆」]『東京新聞』7月26日[『個性の尊重』収録]

イギリスで見聞したこと 養老院・中産者階級と労働者階級・医療制度『あるびよん』40、8月1日[「イギリスの養老院そのほか」と改題『個性の尊重』収録]

巻頭論文選後評『中央公論』72-10、8月1日[座談会：白井吉見、大河内一男、竹内好、鶴見俊輔、丸山真男]

思想家の常道[「変貌」]『新潮』54-8、8月1日

空中査察[「石筆」]『東京新聞』8月2日

自然と社会[「石筆」]『東京新聞』8月9日[『個性の尊重』収録]

日本文化の地位[「石筆」]『東京新聞』8月16日[『個性の尊重』収録]

処女論文のこと マルクス主義の立場から『日本読書新聞』913、8月19日[「処女論文」と改題『個性の尊重』収録]

エレガント？[「石筆」]『東京新聞』8月23日

ある学校騒動[「石筆」]『東京新聞』8月30日[『個性の尊重』収録]

逆コース[「石筆」]『東京新聞』9月6日[『個性の尊重』収録]

歴史教育の問題[「石筆」]『東京新聞』9月13日[『個性の尊重』収録]

弱い横綱[「石筆」]『東京新聞』9月20日[『個性の尊重』収録]

法文経[「石筆」]『東京新聞』9月27日

歴史と現代の危機『心』10-10、10月1日[座談会：鈴木成高、竹山道雄、和辻哲郎、安倍能成]

歴史における日本の先進性『中央公論』72-13、11月1日[座談会：梅棹忠夫、鈴木成高、竹山道雄]

人類史上記念すべき日ー人工衛星の世界史的意義『特集文芸春秋 宇宙時代とソ連の科学』11月25日  
[「人工衛星と世界史」と改題『個性の尊重』収録]

## 1958（昭和33）年

増田四郎著ヨーロッパの横顔 西洋史家の西洋紀行『日本読書新聞』932、1月1日

人工衛星がいくら飛んでも……ーひさかたの天路は遠しー『文芸春秋』36-1、1月1日[「ひさかたの天路は遠し」と改題『個性の尊重』収録]

科学と人間性 新春座談会『読売新聞』1月1日[座談会：兼重寛九郎、亀井勝一郎、中山伊知郎]

道徳教育と科学技術教育『山陽新聞』1月3日[座談会：松永東、蠟山政道、宮原誠一、村田為五郎][道徳教育と科学教育『西日本新聞』1月4日、道徳教育と科学技術教育『北海タイムス』1月4日]

58年度の課題 科学政策と国民の道徳『時事通信 内外教育版』897、898、901、1月7、10、21日[座談会：松永東、蠟山政道、宮原誠一、村田為五郎]

社会主義はたそがれか[「特集現代社会主義の再検討」]『中央公論』73-2、2月1日[「現代社会主義の再検討」と改題『現代社会主義の再検討』収録]

わが「転向」の師匠たち『新潮』55-2、2月1日[『個性の尊重』収録]

ビスマルク問題『学燈』55-2、2月5日

ビスマルクの失脚をめぐる諸問題『史学雑誌』67-2、2月20日[『ドイツ史論集』『ドイツ史論文集』<林健太郎著作集第2巻>収録]

ウィットフォークル氏との対話『心』11-3、3月1日[『個性の尊重』収録]

山本富士子の美しさ「氷壁」(監督・増村保造 大映配給)『中央公論』73-5、5月1日

婦人たちと学生たちーむずかしさとやさしさの陥穽『婦人公論』43-5、5月1日[『個性の尊重』収録]

総選挙を終わって[「文化」]『東京新聞[夕刊]』5月24、25日【(上)人気倒れだった社会党、(下)わざわざした

外交政策】[「総選挙と社会党」と改題『個性の尊重』収録]

棄権はよくない、しかし……—熱情を以て投ずる一票がほしい—『文芸春秋』36-6、6月1日[「積極的棄権と消極的投票」と改題『個性の尊重』収録]

静かなる革命[「大学の窓」]『東京大学新聞』復刊49、6月4日

日教組のあり方[「月曜評論」]『北海道新聞』6月30日[『個性の尊重』収録]

日本の美の発見—山本富士子論[「特集・現代に生きる演技」]『映画評論』15-7、7月1日[「山本富士子論」と改題『個性の尊重』収録]

現代社会主義の再検討[「わが著書を語る」]『出版ニュース』418、7月1日

釈然としないもの—私は素朴な一元論をとらない—[「書評論争 林健太郎著『現代社会主義の再検討』をめぐって」]『図書新聞』460、7月26日

豊田堯『バブーフとその時代』—フランス革命の時代『声』1、10月1日

アルジェリア問題と日本の現状『心』11-10、10月1日[座談会：安部能成、竹山道雄、鈴木成高、高坂正顕、和辻哲郎]

中村菊男著「昭和政治史」と「伊藤博文」[「BOOK・REVIEW」]『三田評論』579、10月1日

貴重なる「実証」の実践『中央公論』73-12<緊急増刊 松川裁判特別号>10月20日

関嘉彦著新しい社会主義 麻生良方社会主義ノート[「はがき書評」]『出版ニュース』430、11月1日

良識は反動ではない『文芸春秋』36-13、12月1日[対談：竹山道雄]

室伏高信著「マッス」機会と大衆の時代「現代」を本格的に解明[「読書」]『読売新聞[夕刊]』12月3日

多忙が心配になる『週刊娯楽よみうり』4-52、12月26日

## 1959（昭和34）年

修正主義の現代的意義『社会思想研究』11-1、1月1日

「笛吹川」と歴史の姿『中央公論』74-2<緊急増刊 文芸特集号>1月20日[日本文学研究資料刊行会編『井伏鱒二・深沢七郎』<日本文学研究資料叢書>(有精堂、1977年11月10日)収録]

問題論争をめぐって[「日本文化研究の対立点」]『新潮』56-2、2月1日

「歴史ブーム」の背後にあるもの『朝日新聞』3月5日

日本ペン・クヘー一言—ケストラ氏の招待拒否から—『北国新聞』3月19日

理想論と現実論『心』12-4、4月1日

移り行くものの影—安倍校長と一高教官室—『文芸春秋』37-4、4月1日[「自由の孤城に住みて」と題して『移りゆくものの影』収録]

宇野弘藏著『資本論』と社会主義[「書評」]『思想』418、4月5日

\*現代の歴史観『真実』5-5、5月1日[『移りゆくものの影』収録]

マルクスの旗の下に—銀杏並木の今昔—『文芸春秋』37-5、5月1日[「銀杏並木の下で」と題して『移りゆくものの影』収録]

マルクス主義との格闘—「暗さ」と「明るさ」の奇妙な二重性『文芸春秋』37-6、6月1日[「暗さと明るさの

谷間」と題して『移りゆくものの影』収録] [『文芸春秋』70-2、1992年2月再録、『常識の立場「文芸春秋」傑作論選』<文春学芸ライブラリー思想11>(文芸春秋、2014年10月20日)収録]

歴史家たちの争い—何故に私はマルクス主義を捨てたのか—『文芸春秋』37-7、7月1日[『移りゆくものの影』収録]

厳密な実証的手法 増田四郎著「西洋封建社会成立期の研究」[「本 批評と社会」]『朝日ジャーナル』1-17、7月5日

アイク・フルシチョフ 相互訪問をどう見る『読売新聞』8月5～7日[座談会：勝間田清一、船田中]

知識人と軍隊—私の「真空地帯」—『文芸春秋』37-9、9月1日[「私の真空地帯」と題して『移りゆくものの影』収録]

日本の中立は可能か『心』12-10、10月1日[座談会：藤山愛一郎、竹山道雄、渡邊善一郎、安倍能成]

“伝記”をめぐる『日本歴史』136、10月1日[座談会：児玉幸多、大久保利謙、高柳光寿、多賀宗集、和歌森太郎]

安保論議を解剖する『自由』1、12月1日

安保闘争に理性を—日本外交の新構想—『文芸春秋』37-12、12月1日

数奇な運命の都市マンダー『ベルリン・鷲と熊』(洋書)[「本 批評と社会」]『朝日ジャーナル』1-39、12月6日

安保論争をどうみるか『朝日新聞』12月15～19日[対談：加藤周一]

## 1960 (昭和35) 年

新党の課題とその役割『経済往来』12-1、1月1日[座談会：中村菊男、追間真治郎]

英知による解決を 機械と人間性対立に[「文明の花開く1960年」]『読売新聞』1月1日

“知識人の責任”とはなにか『自由』3、2月1日[座談会：江藤淳、平野謙、竹山道雄、吉本隆明] [『文学の流れの中で』<江藤淳全対話1>(小沢書店、1974年5月30日)収録]

現代に生きるヒューマニズム—憎しみあいからの解放と人間性回復のために—『社会教育』15-3、3月1日

世界は一つ ニューヨークの印象[「文化」]『読売新聞[夕刊]』3月11日

アメリカの学生運動[「文化」]『読売新聞[夕刊]』5月17日

友好を傷つけうな アメリカの明暗と日本[「文化」]『読売新聞[夕刊]』6月15日

アメリカ便り[「歴史手帖」]『日本歴史』145、7月1日

ベルリンの一週間 文化自由会議に出て[「文化」]『読売新聞[夕刊]』7月11日[「ベルリンの文化自由会議」と改題『わが師わが旅』収録]

社会主義研究所とピカソ展[「文化」]『読売新聞[夕刊]』8月24日

社民党に託す将来 昨今ドイツの内外[「文化」]『読売新聞[夕刊]』9月26日

高姿勢と低姿勢 火ふたを切った西独の選挙戦[「文化」]『読売新聞[夕刊]』10月26日

ミュンヘンの美と歴史 反ベルリンの感情も消えて[「文化」]『読売新聞[夕刊]』11月15日



## 1961 (昭和 36) 年

- ワイマル共和国と現代日本『自由』3-1、1月1日[『歴史と現実』『歴史と体験』『新保守主義』(筑摩書房、1963年)収録、『自由』51-1、2009年1月に再録]
- 誤った必然論を排す 新しい十年代の課題[「文化」]『読売新聞』1月1日
- ミュンヘンのレーニン[「文化」]『読売新聞[夕刊]』2月28日
- 私のスペイン紀行 すぐれた芸術は最大の慰め[「文化」]『読売新聞[夕刊]』5月8日
- ワイマル共和国研究の状況[「学界動向」]『史学雑誌』70-6、6月20日
- ポツダムの日[「文化」]『読売新聞[夕刊]』6月20日
- ドイツ便り[「歴史手帖」]『日本歴史』157、7月1日
- カスタンニエンの花咲くベルリン『中央公論』76-8、8月1日
- ベルリンにおける観察と思索『自由』3-11、11月1日[「ベルリン・一九六一年」と改題『歴史と現実』収録]

## 1962 (昭和 37) 年

- 西ヨーロッパの一体化[「特集 欧州共同市場と日本」]『朝日ジャーナル』4-6、2月11日[『歴史と政治』収録]
- 歴史と政治『朝日新聞』2月5、6日【(上)ナチス研究の総本山、(下)両分野の探求を結ぶ強い問題意識】  
[「ミュンヘンの「現代史研究所」と改題『歴史と政治』収録]
- すつきりしない最近の政治『東京新聞』3月1日[座談会：矢部貞治、郡司浩平]
- 文部大臣の忘れもの 愛国心昂揚の捷径は博物館を整備することだ『文芸春秋』40-3、3月1日[「博物館の重要性」と改題『歴史と現実』収録]
- 外遊ということ『学燈』59-3、3月5日
- 自由主義者の責任『論争』4-2、3月1日[鼎談：平林たい子、遠山景久]
- 憲法論議の問題点[「日本の論壇-1-」]『自由』4-3、3月1日[『歴史と現実』収録]
- 日ソ文化交流の展望 学術的方向への拡大を[「東京論壇」]『東京新聞』3月25日[「日ソ文化交流の方向」と改題『歴史と政治』収録]
- 国際政治と平和の問題[「日本の論壇-2-」]『自由』4-4、4月1日[『歴史と現実』収録]
- 不安な最近の政局『講演時報』1113、4月1日[座談会：矢部貞治、郷司浩平、岩崎五]
- 現代の帝国主義論[「日本の論壇-3-」]『自由』4-5、5月1日[『歴史と現実』収録]
- 欧州統合の史的意味『自由』4-5、5月1日[座談会：鈴木成高、高垣金三郎]
- 現代歴史学の課題『中央公論』77-6、5月1日[『歴史と現実』『新保守主義』(筑摩書房、1963年)収録]
- 総説[「回顧と展望 一九六一年の歴史学界」]『史学雑誌』71-5、5月20日
- 新感覚の欧州文明論 L.コラール著 小嶋威彦・鈴木成高訳「歴史の運命と進歩」[「読書」]『読売新聞[夕刊]』5月31日
- 西欧・ソ連を中心として一竹山道雄氏を囲んで一『心』15-6、6月1日[座談会：林健太郎、長谷川才次、

高坂正顯、安倍能成]

西ドイツは阿呆の国か[「日本の論壇-4-」]『自由』4-6、6月1日[『歴史と現実』収録]

日本歴史の三度目の維新 今日までの日本の歩み[「特集・この十年」]『文芸春秋』40-6、6月1日[掲載時に削除された部分を補筆し「この十年・世界と日本」と改題『歴史と現実』収録]

外交政策の幅と筋[「日本の論壇-5-」]『自由』4-7、7月1日[『歴史と現実』収録]

カギ十字を裁くー「ニュールンベルグ裁判」を観て『自由』4-7、7月1日[座談会：竹山道雄、関嘉彦、村瀬興雄]

[「ソ連の核実験再 開関係者の声」]『朝日新聞』8月6日

平和運動の心理と論理[「日本の論壇-6-」]『自由』4-9、9月1日[『歴史と現実』収録]

ベルリン問題のガン ウルブリヒト[「日曜時評」]『読売新聞「夕刊」』9月2日[『歴史と現実』の「あとがき」に再録]

愛国心の理論と実践『自由』4-10、10月1日[『歴史と現実』『資料で読む戦後日本と愛国心 第2巻 繁栄と忘却の時代』(日本図書センター、2009年)収録]

現代日本の思想『自由』4-10、10月1日[討議：石田一良、大島康正、鈴木重信、関嘉彦、中村光夫、竹山道雄、福田恒存]

“キューバ解決”と今後の問題点 “基地撤去”の実証『読売新聞』10月30日[座談会：法眼晋作、佐伯喜一]

ミュンヘン革命の悲劇『心』15-11、11月1日[『歴史と政治』収録]

イデオロギー外交の終わり 打ち破られた幻影[「日曜時評」]『読売新聞「夕刊」』11月18日[『歴史と政治』収録]

現代社会と自由ー創刊三周年座談会ー『自由』4-12、12月1日[座談会：木村健康、関嘉彦、平林たい子、竹山道雄]

## 1963 (昭和 38) 年

混合政府の提唱『中央公論』78-1、1月1日[「混合政府論」と改題『世界史と日本』収録]

日本文化のために知識人はなにをなしうるか[「シンポジウム日本の目標を考える 第二回」]『論争』5-1、1月1日[シンポジウム：川喜田二郎、中根千枝、西義之、福田恒存、村松剛、吉田夏彦、若泉敬]

朴政権を評価、李ライン、公正な解決[「日韓会談に望む」]『東京新聞』1月5日

独得だが単純な観察 A・トインビー、黒沢英二訳『失われた自由の国』[「本 批評と社会」]『朝日ジャーナル』5-1、1月6日

ナショナリズムと近代世界史[「日本のナショナリズム」]『信濃毎日新聞』1月9日[「日本のナショナリズム」と改題『歴史と政治』収録]

論壇派閥の解消のために『自由』5-2、2月1日

竹山道雄著「剣と十字架」キリスト教精神にひそむ無慈悲な力の教義[「読書」]『読売新聞「夕刊」』2月14日

都留氏の平和論への疑問『国防』12-3、3月1日

近代史の新しい見方『自由』5-3、3月1日[対談：E.O.ライシャワー] [「近代化論の考え方」と改題、E.O.ライシャワー『日本近代の新しい見方』<講談社現代新書>(講談社、1965年)収録]

山口定著「アドルフ・ヒトラー—第三帝国への序曲」村瀬興雄著「ヒトラー—ナチズムの誕生」[「批評と紹介」]『史学雑誌』72-4、4月20日

総説[「回顧と展望 一九六二年の歴史学界」]『史学雑誌』72-5、5月20日

ドイツ[「回顧と展望 西洋史(近代)」]『史学雑誌』72-5、5月20日

\*ミュンヘンの下宿生活『週刊文春』5-21、5月27日[『わが師わが旅』収録、ただし初出掲載を確認できない]

カトリックと政治 時代の流れつかむ態度[「政治と宗教」]『読売新聞』6月30日[『歴史と政治』収録]

歴史を作るものは何か『心』16-7、7月1日[座談会：安倍能成、長谷川才次、木村健康]

宗教団体か政治団体か 創価学会の回答を読んで『文芸春秋』41-7、7月1日[座談会：藤原弘達、平林たい子、宮城音彌]

ブルクハルト『イタリアルネサンスの文化』[「一冊の本」]『朝日新聞』7月21日[朝日新聞学芸部編『一冊の本 2』(雪華社、1965年4月1日)、[「一冊の本 全」](雪華社、1967年)、改装新版『一冊の本 全』(雪華社、1972年)収録]

世界史における日本の地位[「特集・第七十七回信濃教育会総集会招待員講演」]『信濃教育』921、8月1日[『世界史と日本』収録]

先進国すれすれ日本論『中央公論』78-10、10月1日[座談会：大宅壮一、猪木正道]

正しい現実認識を 冷戦緩和にあたって[「日本の動き世界の動き」]『朝日新聞』10月14日[『歴史と政治』収録]

中ソ論争の神話と現実—イデオロギーとナショナル・インタレスト『自由』5-11、11月1日[『世界史と日本』収録]

精神面の再認識を 池田首相の倍増計画[「日本の動き世界の動き」]『朝日新聞』11月14日[『歴史と政治』収録]

反共ということ[「ずいひつ」]『同盟』65、11月15日

ケネディ暗殺と国際政局 対ソ平和戦略に暗影『読売新聞(夕刊)』11月23日[座談会：大平善梧、白神勤]

不幸な主役たち ドイツ近代史の人間像『図書新聞』734、11月30日[「ワイマール共和国の人間像」と改題]『歴史と政治』収録]

日米文化交流の将来『経済往来』15-12、12月1日[対談：松下正寿]

マルクス主義発生の歴史的背景『中央公論』78-12、12月1日[「マルクス主義の歴史的背景」と改題]『世界史と日本』『歴史と体験』収録]

室伏高信著「声なき声」思想の若々しさ[「読書」]『読売新聞(夕刊)』12月5日

## 1964 (昭和 39) 年

ナショナリズムの問題『心』17-1、1月1日[座談会：鈴木成高、関嘉彦、安倍能成]

世界政治の中の日本 “自主性”中心に座談会『毎日新聞』1月3日[座談会：中山伊知郎、高坂正堯]

「侵略」もはや不可能 世界史の新しい歩み[「日本の動き世界の動き」]『朝日新聞』1月6日[『歴史と政治』収録]

日米外交路線の新しい局面『潮』64、2月1日[座談会：大平善梧、汐見太郎、内田健三、村上薫]

国民的利益めざせ 自民、組織政党への道[「日本の動き世界の動き」]『朝日新聞』2月10日[『歴史と政治』収録]

竹山道雄と清水幾太郎—言論の責任について[「特集知識人は何を考えているのか」]『潮』64、3月1日  
[『世界史と日本』収録]

ドイツ・デモクラシーの悲劇—シュトレゼマンの人物—『心』17-3、3月1日[「シュトレゼマンの人物」と改題『歴史と政治』収録]

ド・ゴール外交をどうみるか『自由』6-3、3月1日[「ド・ゴール外交の性格」と改題『世界史と日本』収録]

まず国民的利益の自覚を[「今月の言葉」]『中央公論』79-3、3月1日

調和のある発展を「人づくり」の出発点[「日本の動き世界の動き」]『朝日新聞』3月9日[『歴史と政治』収録]

シュトレゼマンと DVP - 文献紹介 - [「学界動向」]『史学雑誌』73-3、3月20日[「シュトレゼマンとドイツ人民党」と改題「歴史的断章—十九世紀から二十世紀—」(『ドイツの歴史と文化』< 林健太郎著作集第3巻 >)収録]

イデオロギーの共存『経済往来』16-4、4月1日 [座談会：大平善悟、小幡操]

迫られる生活向上 論争する中ソの内情[「日本の動き世界の動き」]『朝日新聞』4月6日[『歴史と政治』収録]

福祉国家は果して理想か『潮』47、5月1日[対談：大島康正]

総説[「回顧と展望—一九六三年の歴史学界」]『史学雑誌』73-5、5月20日

さまよえる忠誠心『潮』48、6月1日[座談会：谷川徹三、大熊信行、尾高邦雄、柴田高好]

新しい時代の新しいエリート—エリートたちは素質を自覚し、努力せよ—『経済往来』16-6、6月1日  
[対談：坂本二郎]

新興国共通の課題 近代化と伝統の結合[「日本の動き世界の動き」]『朝日新聞』6月8日[『歴史と政治』収録]

世界の流れと日本『経済往来』16-7、7月1日[座談会：長洲一二、福田敏一、熊本良忠]

的を射た批判なし 自民総裁争いに失望[「日本の動き世界の動き」]『朝日新聞』7月6日[『歴史と政治』収録]

こんな所にこんな苦心がある—歴史を叙述する場合—『言語生活』155、8月1日

短夜 世界を語る『心』17-8、8月1日[鼎談：安倍能成、竹山道雄]

歴史認識の二つの途[1964年5月23日、第15回日本西洋史学会公開講演の草案をもとに執筆]『日本』  
< 大日本雄弁会講談社 > 7-8、8月1日[『世界史と日本』収録]

太平洋戦争から学ぶもの『文芸春秋』12-8、8月1日[『世界史と日本』収録]

農民解放を助けよ 東南アでの米の義務[「日本の動き世界の動き」]『朝日新聞』8月10日[『歴史と政治』収録]

戦後史をどう観るか『中央公論』79-9、9月1日[『世界史と日本』収録]

「科学」から「空想」へ 社会主義の新しい道[「日本の動き世界の動き」]『朝日新聞』9月14日[『歴史と政治』収録]

社会主義とは何であったのかー第1インター百年祭を迎えてー[「特集・日本の革新勢力の国際路線」『自由』6-10、10月1日[『世界史と日本』『歴史と体験』収録]

これからのソ連 フルシチョフ退陣『読売新聞』10月17日[座談会：山田久就、野々村一雄]

\*保守主義の復権『産経新聞』11月3日[『歴史と政治』収録、ただし初出掲載を確認できない]

転換期にたつ世界ー国際情勢の危機と日本の役割ー『潮』54、12月1日[座談会：加瀬俊一、野々村一雄、小幡操]

池田政治の四年間と後継内閣の課題『中央公論』79-12、12月1日[座談会：藤井丙午、宮沢喜一]

増田四郎著東と西 学殖にしむ随筆集[「読書」]『読売新聞[夕刊]』12月10日

\*世界の動きと日本[1964年1月21日講演]『声』97、月日未詳[『世界史と日本』収録]

## 1965（昭和40）年

カール・レーヴィット著、信太・長井・山本共訳『世界史と救済史』[「新刊紹介」]『史学雑誌』74-1、1月1日[「書評再録」]『創文』26、1965年4月1日に再録]

ゲルハルト・リッター教授との一時間『学燈』62-1、1月5日[『歴史と政治』収録]

現在の国際情勢と日本の立場『官公労働』19-1、1月15日[『歴史と政治』収録]

革新政党と国際路線[民社研全国研究集会における研究報告「核時代における日本革新諸勢力の国際路線」概要]『同盟』79、1月15日

知識人の現状と役割『潮』56、2月1日[座談会：福田恒存、高坂正堯、村松剛、中村雄二郎]

白くなったパリ[「随筆」]『現代の眼』6-2、2月1日

過去の償い『心』18-2、2月1日[「過去の償いーヤスパースの「ハフトゥング」論ー」と改題[『歴史と政治』収録]

何がナショナル・インタレストか『自由』7-2、2月1日[座談会：平林たい子、福田恒存、武藤光朗]

中山伊知郎著「日本の近代化」成功の秘密と課題 経済と人間面から説く[「読書」]『読売新聞[夕刊]』2月18日

外交政策の理想主義と現実主義ー自由世界と共産世界に通ずる歴史の法則とは[「特集・決断の時、日本外交」]『潮』57、3月1日[「外交政策における理想主義と現実主義」と改題]『世界史と日本』収録]

田中耕太郎氏を囲んで『心』18-3、3月1日[座談会：田中耕太郎、高木八尺、嘉治隆一、安倍能成]

世界の多極化と東西両体制の歩みより『再建』19-3、3月1日

歴史の流れは変わった 世界は多極化している『読売新聞』3月14日[『歴史と政治』収録]

なぜマルキシズムを見捨てたか 我々は決定的な誤りをこうして見破った[「特集・マルキシズムと日本」]『潮』58、4月1日[座談会：林健太郎(司会)、水野成夫、林房雄、大宅壮一]

平和のイデオロギーと平和の政策[「南ベトナム情勢をどう見るか」]『自由』7-4、4月1日[『世界史と日本』収録]

継承・発展が歴史の実相 誤った問題提起[「文化 明治百年と戦後二十年」]『朝日新聞[夕刊]』4月7日[「明治百年と戦後二十年」と改題]『歴史と政治』収録]

ヤスパースの世界史観『世界経済』20-5、5月1日[『歴史と政治』収録]

ラーン川のほとりーシュタインとビスマルク 『心』 18-6、6月1日[『歴史と政治』収録]

私の言葉[インタビュー]『週刊新潮』10-26、7月3日

世界史と日本[「わが著書を語る」]『出版ニュース』663、7月11日

田中美知太郎著「自分のこと世界のこと」学者、警世家として人間味ゆたかな評論集[「読書」]『読売新聞  
[夕刊]』7月29日

アトゥール・ローゼンベルク著吉田輝夫訳『ヴァイマル共和国史』[「新刊紹介」]『史学雑誌』74-8、8月  
20日

韓国の敵意 日本の侮り『自由』7-9、9月1日[座談会：田駿、板垣与一]

日韓問題の根底にあるもの『展望』81、9月1日 [座談会：荒井正大、石橋政嗣、宇都宮徳間、旗田た  
かし]

解釈の違い問題ない[「日韓批准をこう思う」]『講演時報』1280、10月第2週

歴史と政治[「わが著書を語る」]『出版ニュース』672、10月11日

歴史教育[「日本の回復」]『読売新聞[夕刊]』10月26、27、29日、11月1日【1 家永氏の訴訟 検定は違憲  
ではない、2 歴史観の空白 復活と反対をめぐって、3 理論の流入で破れた東西の出会い、4 新しい歴史  
認識】[読売新聞社編『日本の回復』(日本教文社、1966年)収録]

教科書検定違憲の問題 家永氏の批判に答える[「文化」]『読売新聞[夕刊]』11月9、10日

歴史教育観の相違 三たび家永三郎氏へ[「文化」]『読売新聞[夕刊]』11月20日

グーチ先生[「大学の窓」]『東京大学新聞』636、11月22日

世界史の新しい動き『心』18-12、12月1日

大衆運動と戦後思想『自由』7-12、12月1日[座談会：木村健康、関嘉彦、竹山道雄、福田恒存、武藤光  
朗]

## 1966 (昭和41) 年

これからの日本外交を語る『政策月報』120、1月15日[座談会：福島慎太郎、小坂善太郎]

終戦と知識人の動向『自由』8-2、2月1日[座談会：高柳賢三、竹山道雄、中山治一、高橋正雄、中村菊  
男、鈴木成高、一又正雄、原敬吾]

戦後二十年の政治力学ー過去の反省と未来の展望『自由』8-2、2月1日[『戦後日本の思想と政治』収  
録]

縁の下の力持ち[3月12日挨拶(於言論人懇話会披露会)「マスコミの偏向を正せ 各氏のあいさつから」]  
『言論人』2、4月1日

喧嘩両成敗『言論人』2、4月1日

歴史・この未知なるもの『展望』89、4月1日[「戦後歴史学の課題」と改題、改訂新版『史学概論』「付  
論」として収録、「戦後歴史学の諸問題」と改題『歴史学と歴史理論』<林健太郎著作集第1巻>収録]

防衛論議に学界の新風を[「私の提言」]『東京新聞』4月25日

ホイシング著「文化史の課題」 ヤスパース著「哲学的自伝」[「私の書評」]『自由』8-5、5月1日

原因論と責任論『潮』72、6月1日

中共政策で考えるべきことー日本をめぐる米・中・ソ『経済往来』18-6、6月1日[座談会：入江通雅、桶谷繁雄、曾村保信、桑原寿二、中村菊男]

共産主義の非人間性『言論人』4、6月1日

小泉信三著「福沢諭吉」柳田泉著「福地桜痴」[「私の書評」]『自由』8-6、6月1日

ランケについての新発見[「研究ノート」]『朝日新聞[夕刊]』6月2日

学問と政治 清水・坂本両氏の意見に寄せて[「文化」]『朝日新聞[夕刊]』7月1日

清水幾太郎著「現代思想」[「私の書評」]『自由』8-7、7月1日

家永氏の「林健太郎氏との検訂訴訟論争」に対する答え『歴史学研究』314、7月15日

安倍先生のこと[「安倍能成追悼」]『心』19-8、8月1日

「戦後」の意味『自由』8-8、8月1日[『戦後日本の思想と政治』、戦後思想研究会編『戦後と反体制』(桜楓社、1970年6月20日)収録]

オールド・ライト ニュー・ライト[「夏の読物」]『講演時報』1320、8月第2週

大東亜戦争と日本の知識人たち(四)ー戦時中の左翼ー『心』19-9、9月1日[座談会：竹山道雄、江藤淳]

ソ連東欧の旅[「文化」]『読売新聞[夕刊]』10月18、19日[「大いなる幻影ーソ連東欧の旅からー」と改題『共産国 東と西』収録]

共産主義諸国の内情『言論人』9、11月1日[座談会：石川忠雄、林三郎]

共産諸国の複雑さ『自由』8-12、12月1日[「東欧諸国の複雑さ」と改題『共産国 東と西』収録]

東ヨーロッパの歴史家たちーブタペスト・プラーハ・ワルシャワ・モスクワー『中央公論』81-12、12月1日[『共産国 東と西』収録]

ロシア人は馬鹿なのか？私の”実感的ソ連論”ー二カ月のソ連旅行の総決算『文芸春秋』44-12、12月1日[『共産国 東と西』『歴史と体験』収録]

\*「日本史教科書」を批判する『国民の声』<日本自由主義研究所刊>164、12月5日

## 1967 (昭和 42) 年

欧州の最新情勢をみつめて『経済往来』19-1、1月1日[座談会：後藤基雄、林三郎]

大学問題『言論人』12、1月16日[座談会：大平善梧、桶谷繁雄]

紅衛兵と国連『心』20-2、2月1日

文化革命を裸にする 中共特派視察団報告『毎日新聞』2月11～20日【1 国境の駅深圳で、2 異様な歓迎踊り、3 紅衛兵の群れ、4 目撃したつるし上げ、5 壁新聞いっぱい、6 北京は「歴史の都」か、7 紅衛兵はどこへ行く、8 ソ修正米帝ハンターイ、9”人民英雄”の美談、10 サヨナラ激動の国】[「文化大革命見聞記」と改題『共産国東と西』『歴史と体験』『わが師わが旅』収録]

Cultural Revolution as I see it『The Mainichi Daily News』3月13～22日[「文化革命を裸にする 中共特派視察団報告」(『毎日新聞』1967年2月11～20日)の英語版]

[「松下か美濃部か阿部か 東京都知事選 私がこの人を推薦する理由 実務能力と反共でー松下正寿氏」]『サンデー毎日』46-12、3月19日

文化大革命を審判する『中央公論』82-4<緊急増刊>、3月21日[座談会：大宅壮一、高木健夫、白井吉]

見]

共産圏の実情—ソ連東欧・中共を視察して『自警』49-4、4月1日

日本における「文化大革命」の問題点『自由』9-4、4月1日[『戦後日本の思想と政治』収録、「文化大革命の問題点—日本の思想界との関連における—」と改題『共産国東と西』収録]

総合雑誌と巻頭論文『中央公論』72-6、5月1日[座談会：丸山真男、白井吉見、大河内一男、竹内好、鶴見俊輔]

現代の神話・パリ=コミュニン[「思想のフロンティア・シリーズ2-」]『文芸春秋』45-5、5月1日[『戦後日本の思想と政治』『歴史と体験』収録]

マルクスと「パリ・コミュニン」[「偏向言論人」批判]『言論人』20、5月16日

総説[「回顧と展望—一九六六年の歴史学界」]『史学雑誌』76-5、5月20日

著者と語る 林健太郎著『共産国 東と西』『改革者』87、6月1日[きき手：遠藤欣之助]

いつまで続くぬかるみぞ 裏から見た「文化大革命」の正体『言論人』21、6月1日[対談：衛藤瀧吉]

平和についての断想[「特集「平和」のゆくえ」]『道徳と教育』10-3、6月1日

[「新委員長・民社党に期待する」]『改革者』88、7月1日

中共の兵隊『心』20-7、7月1日

マルクスと一八四八、九年の革命『三田評論』662、7月1日[『歴史の精神』収録]

大いなる幻影 ソ連東欧の旅『郵政』19-9、9月1日

酔乎たる古典の価値—レニングラード・バレエ『白鳥の湖』—[「プロムナード 舞踊」]『中央公論』82-10、9月1日

二つの大戦とドイツ『朝日新聞』10月26日

きのうのソ連 きょうのソ連[「特集・ロシア革命五十年」]『改革者』92、11月1日[座談会：堀江忠男、原子林二郎、塩路一郎、木畑公一]

文化史としての戦争史『軍事史学』11、11月1日

ソビエト見たまま ロシア革命五十年の功罪『言論人』31、11月1日[座談会：嘉治隆一、嶋野三郎]

稀に見る誠実の書—村松暎「毛沢東の焦慮と孤独」—[「書評」]『三田評論』665、11月1日

角田順著「満州問題と国防方針」中村菊男著「天皇制ファシズム論」[「私の書評」]『自由』9-12、12月1日

## 1968（昭和43）年

新春随想—何気なく、あたりまえのことを—『言論人』35、1月1日

私が予見する人類の未来[アーノルド・トインビーの講演の紹介・解説]『自由』10-1、1月1日

秀村欣二著「ネロ」鱗田豊三著「戦争と人間の風土」[「私の書評」]『自由』10-1、1月1日

明治百年 その歴史的意義[インタビュー]『日本経済新聞』1月1日

一九三〇年代の日本とドイツ—一つの比較試論—『批評[第3次]』10[冬季号]、1月15日[『歴史と体験』収録]

日本の近代化と今後の進路『産経新聞』1月10日[明治百年記念学生懸賞論文審査員座談会：エドウィ]



ン・O・ライシャワー、大河内一男、中山伊知郎、猪木正道、和歌森太郎、白井吉見、土屋清]

ボールディング著清水幾太郎訳「20 世紀の意味」加藤寛著「最適社会の経済学」[「私の書評」]『自由』10-2、2月1日 p.120~123

ドイツの歴史辞典における日本[「歴史手帖」]『日本歴史』237、2月1日

マスコミ批判 読者の声の価値判断 利用し利用される新聞投書の裏のうら『言論人』38、2月16日[座談会：阿川弘之、大平善梧]

徹底した討論を[「沖縄・ベトナム・・・防衛を結ぶ国民的合意とは」]『経済往来』20-3、3月1日

事件と報道[「特集・現代を考える」]『自由』10-3、3月1日

羊頭を掲げて狗を売るのは誰か 左翼的言動が小イキなポーズとなるにつぼん製ア・ラ・モード時代『言論人』41、4月1日[座談会：林三郎、西義之]

シンポジウム「日本の教育」これでよいか[「文化」]『読売新聞[夕刊]』4月12、13、15日[討論：清水義弘、宮之原貞光、唐沢富太郎]

新聞は公器にかえれージョンソン声明以後ー『言論人』43、5月1日

歴史理論[「回顧と展望一九六七年度の歴史学界」]『史学雑誌』77-5、5月20日

現代野党の欠陥『経済往来』20-6、6月1日[座談会：神川信彦、後藤基夫、岡野加徳留]

W. ケーギ著坂井直芳訳『ブルクハルトとヨーロッパ像』[「新刊紹介」]『史学雑誌』77-6、6月20日

論壇時評 [「文化」]『東京新聞』6月24、25日

孤独な英知の歩み 日本にギリシア学を築いた 田中美知太郎著哲学のために[「読書」]『読売新聞[夕刊]』6月27日

国家と教育『学校経営』13-7、7月1日[対談：鈴木重信]

意識的な虚構記事 総長会見と新聞『言論人』48、7月16日

改革者[「私の言葉」]『改革者』100・101、8月1日

民主社会主義の歴史と理論[民社研労働学校誌上講座]『改革者』102、103、9月1日、10月1日

明日の日本を考える『佼成』19-9、10、9月1日、10月1日[座談会：和田耕作(司会)、庭野日敬、竹山道雄、関嘉彦]

東ヨーロッパと西ヨーロッパの動揺『汎交通』68-9、9月1日

激動する大学を救うもの 今回150万学生の中の小さな良識よ、出でよ！『言論人』52、9月16日[座談会：桶谷繁雄、村松暎、笠原昭三]

チェコの自由は死んだ『改革者』103、10月1日[座談会：入江通雅、原子林二郎、関嘉彦]

激動する東欧『経済往来』20-10、10月1日[座談会：林三郎、気賀健三、中西治]

ソ連の共産圏支配は失敗する『現代』2-10、10月1日

暴力と現代社会『自由』10-10、10月1日[座談会：エドワード・ルーリー、竹山道雄]

明治百年の意義について『時の動き』12-21、10月23日[座談会：高坂正顕、勝部真長]

明治百年その歴史的意義[インタビュー「明治百年とこれからの日本ー社説・対談・入選論文に見る三つの意見」]『時の動き』12-21、10月23日

チェコ問題異聞『心』21-11、11月1日

大学の騒ぎのなかで[「大学の革命(特集)】『自由』10-11、11月1日[『歴史と体験』収録]

民主主義と法秩序『時の動き』12-23、11月15日[座談会: 林健太郎(司会)、藤木英雄、豊島英次郎]

不法拘禁の八日間 焦点の人・林健太郎氏を囲んで『言論人』57、12月1日[座談会: 阿川弘之、西義之、平林たい子]

## 1969 (昭和44) 年

軟禁173時間の記[「東大紛争の嵐の中で】『文芸春秋』47-1、1月1日

百七十三時間の真実『自由』11-1、1月1日[対談: 竹山道雄][『変革期のなかの自由』<自由選書>(自由社、1971年3月15日)収録]

文学部、処分問題で見解『東京大学新聞』777、2月17日

大学教授の実力と無力[「特集苦悩する大学教授】『文芸春秋』47-5、5月1日[座談会: 扇谷正造、会田雄次、奈良本辰也、向坊隆]

地下鉄好き[「雑記帳】『暮しの手帖』1、7月1日

[「東京大学」確認書の効用[「特集大学紛争渦中からの報告】『自由』11-8、8月1日

歴史の現在と将来『自由』11-9、9月1日 [座談会:W.W.ロストウ、木村健康]

国会は審議の場 野党の自覚欠く社会党[「国会正常化 二大政党にもの申す】『朝日新聞』9月3日

明治人の面日曜如 亀井高孝著葦蘆葉の屑籠[「時事通信社出版物ご案内 新刊】『時事解説』7169、9月24日

現下教育上の問題点と今後の課題『信濃教育』995、10月1日

大学法雑感[「オピニオン】『諸君!』1-4、10月1日

進歩的文化人への適確な批判—中村勝範著「現代文化人論」—[「書評】『三田評論』687、11月1日

「国を守る」とは何か 総まとめの対談『朝日新聞[夕刊]』11月13、14日[対談: 久野収][「国を守るとは何か 七〇年安保を前にして」と改題『平和・権力・自由』<久野収対話集・戦後の渦の中で2>(人文書院、1973年)収録]

東大『闘争』の教訓 似而非良心主義は通用しない『言論人』80、11月16日

新聞はどこへ行く?型にはまった論調のパターン『言論人』82、12月16日[座談会: 福田恆存、西義之]

## 1970 (昭和45) 年

対決 日本に革命は起りうるか『諸君!』2-1、1月1日[対談: 井上清]

東大紛争とは何だったのか『文芸春秋』48-1、1月1日[「東大紛争の一年」と改題『歴史と体験』収録]

繁栄の中での社会主義[「70年の対話】『読売新聞』1月26日[対談: 高橋正雄]

朝日新聞安保特集批判『自由』12-2、2月1日 [『戦後日本の思想と政治』収録]

70年代への思想 社会党の敗北、学園紛争の衰退をみて『言論人』86、2月16日

大学の現状と今後の課題『経済往来』22-3、3月1日 [討論: 大島康正、高山岩男、田中直吉、福田信之、

気賀健三]

一大財団の設立を『心』23-3、3月1日

現代日本の歴史的課題『東洋文化 東洋文化振興会々報』16、3月20日

学者の老健『向陵駒場』12-2、4月15日[『赤門うちそと』『わが師わが旅』収録]

日本は軍国主義か一日中覚書貿易交渉をめぐって『言論人』91、5月1日[座談会：林三郎、衛藤藩吉]

ピーター・ゲイ著到津十三男訳「ワイマール文化」[「書評」]『経済往来』22-6、6月1日

自民党と公明党は連携できる『現代』4-6、6月1日[対談：石原慎太郎]

歴史の遊戯を脱れて『諸君!』2-7、7月1日[『歴史と体験』収録]

“安保”めぐる両論 坂本二郎氏の正論に救い[「論壇散策」]『言論人』97、7月20日

国防について『心』23-9、9月1日[座談会：中曽根康弘、入江通雅、竹山道雄]

日中問題をどう見る? [「論壇散策」]『言論人』106、9月20日

今もなお厚い壁 モスクワ「国際歴史学会」の裏表『自由』12-11、11月1日[『赤門うちそと』収録]

モスクワとミュンヘン『心』23-11、11月1日[『赤門うちそと』収録]

「断絶」を信じない[「一九七〇年代の課題 現代日本 100 人の意見」]『中央公論』85-12、12月1日

三島事件の評価 命を賭けた誠実さ その死の精神的意味を思う『言論人』112、12月20日

## 1971 (昭和 46) 年

日本人にとって 天皇とは何か『諸君!』3-1、1月1日[座談会：福田恆存、司馬遼太郎、山崎正和][『現代人の可能性』<福田恆存対談・座談集 第7巻>(玉川大学出版部、2012年)、『日本が震えた皇室の肉声』(文芸春秋、2013年)収録]

新聞よ公害を撒きちらすな『言論人』115、1月20日[座談会：村松暎、宮島竜興]

天皇観をめぐって[「特集 三島事件の核心」]『新潮』68-2<臨時増刊>1月20日[「三島由紀夫と私」と改題『赤門うちそと』収録]

大正昭和の文化人『心』24-2、2月1日[座談会：鈴木成高、市原豊太、竹山道雄、唐木順三]

三島由紀夫と事件の背景[「特集 三島由紀夫の死」]『自由』13-2、2月1日[座談会：竹山道雄、杉森久英、麻生良方]

神話と歴史教育—荒唐無稽は歴史的価値がないか—[「建国記念日によせて」]『言論人』116、2月5日

保守革命家の悲劇『諸君!』3-3、3月1日[『赤門うちそと』収録]

大学問題その後 大学改革の声も潰えたキャンパスからの報告『言論人』119、3月5日[座談会：神沢惣一郎、川上源太郎]

戦前と現代 ファシズムはやってくるか『自由』13-4、4月1日[座談会：関嘉彦(司会)、高橋正雄、佐伯彰一、志水速雄]

国家は永遠のものか『諸君!』3-4、4月1日[シンポジウム：田中美知太郎、鈴木成高、高坂正堯]

安易すぎる国交回復論の背景[「論壇散策」]『言論人』122、4月5日

天皇制のあり方について『文芸春秋』49-7<臨時増刊>5月10日

総説[「回顧と展望 一九七〇年の歴史学界」]『史学雑誌』80-5、5月20日  
既存倫理への”類型的”反逆を衝く[「論壇散策」]『言論人』127、5月25日  
人間不在の歴史教科書『自由』13-6、6月1日[座談会：尾鍋輝彦、原敬吾、福地重孝、土屋道雄]  
長寿吉氏の逝去を悼む[「訃報」]『史学雑誌』80-6、6月20日  
民族文化の真髓と歴史[「論壇散策」]『言論人』130、6月25日  
中国人は神ではない[「中国問題の核心—読者の意見」]『改革者』136、7月1日  
アメリカへの基本認識を問う—いかに友好関係を設定するか—[「論壇散策」]『言論人』133、7月25日  
田中美知太郎著「時代と私」[「私の書評」]『自由』13-8、8月1日[「田中美知太郎氏の『時代と私』」と改題『赤門うちそと』収録]  
最後に笑うもの 日本共産党の大きな賭け[「特集 日本共産党はどこへゆく」]『諸君!』3-8、8月1日  
アメリカで起きているもの『言論人』136、8月25日[座談会：田中英夫、本間長世]  
世界から見た日本『信濃教育』1018、9月1日  
小学校のときの先生がた[「わたしの先生」]『小一教育技術』25-7、10月1日[「小学校の時の先生方」と改題『わが師わが旅』収録]  
「国家」を考える 否定、肯定ですまぬ 興味深い田中、山崎対談[「論壇散策」]『言論人』142、10月25日  
本を読む意味 心の欲求を満たす『日本経済新聞』10月29日[『赤門うちそと』収録]  
日本の外交能力[「特集日米外交とアメリカ」]『自由』13-11、11月1日[座談会：衛藤審吉、蠟山道雄]  
東大紛争雑感『心』24-11、11月1日[『歴史と体験』収録]  
「歴史はくりかえす」という神話『諸君!』3-11、11月1日  
身近な問題に二つの秀作[「論壇散策」]『言論人』145、11月25日  
常呂遺跡『文芸春秋』49-15、12月1日[『赤門うちそと』収録]

## 1972（昭和47）年

日本人の国際感覚『心』25-1、1月1日[座談会：高山岩男、鈴木成高、竹山道雄]  
日中関係の進め方『言論人』149、1月5日  
学校教育の役割『中等教育資料』21-1、1月15日  
「女らしい」人[「平林たい子さんを偲ぶ」]『自由』14-4、4月1日  
\*六中今昔『朝陽』＜東京府立第六中学校朝陽会＞創立50周年記念号、4月[『赤門うちそと』、「御苑の翠」と改題『わが師わが旅』収録]  
女と革命[「文明交差点」]『週刊ダイヤモンド』60-16、4月15日  
革命の論理[「文明交差点」]『週刊ダイヤモンド』60-17、4月22日  
月刊誌の論文を見て[「論壇散策」]『言論人』160、4月25日  
イデオロギー思考[「文明交差点」]『週刊ダイヤモンド』60-18、4月29日  
「日本人」に誇りを[「時評」]『先見経済』1377、5月22日

歴史と体験[「わが著書を語る」]『出版ニュース』900、5月1日

革命の帰結[「文明交差点」]『週刊ダイヤモンド』60-20、5月13日

第一討議 社会主義の理論とイデオロギー[「国際セミナー・日本が目ざすべき社会主義のために」]『自由』14-6、6月1日[議長：中山伊知郎、A.ブルック、報告者：関嘉彦、A.クロスランド、討議者：大来佐武郎、林健太郎、正村公宏、公文俊平、力石定一、江田三郎、G.マルティネ、R.レーベントール、H.アーント、G.カールソン、H.フィッシャー、E.ライシャワー、O.シク、A.ダッタ]

破産した色眼鏡—ベトナム情勢で見当ちがい—[「論壇散策」]『言論人』166、6月25日

沖縄返還の日に思う『心』25-7、7月1日

第四討議 社会主義と文化[「国際セミナー・日本が目ざすべき社会主義のために」]『自由』14-7、7月1日[議長：林健太郎、報告者：R.ガローディ、武藤光朗、討議者：P.ブラッハシュタイン、A.ブロック、H.フィッシャー、R.ガローディ、L.ラベッツ、R.レーベントール、G.マルティネ、E.ライシャワー、G.トッテン、江田三郎、岡野加徳留、香山健一、佐瀬昌盛、清水慎三、志水速雄、関嘉彦、高橋正雄、芳賀紘、正村公宏、武藤光朗、和田春生]

メッテルニヒとキッシンジャー『文芸春秋』50-9、7月1日

思索と実践のすぐれた集大成—江藤淳著「アメリカ再訪」[「書評」]『三田評論』718、8月1日[『江藤淳』<群像日本の作家27>(小学館、1997年)収録]

日本思想のあり方 新事態の中でじっくり考え直そう[「論壇散策」]『言論人』170、8月5日

大学は静かになったか『時事評論』4-11、8月30日

鑑定書 東京高等裁判所昭和四五年(行コ)第五三号[「特集 教科書検定訴訟控訴審」]『教育委員会月報』24-5、8月

不勉強家の作文「論壇時評」『諸君!』4-9、9月1日

ゲリラはゲリラ[「改めて問われる“平和の祭典”の意味」]『週刊読売』31-47、9月23日

困惑する”進歩派”日中問題で面白い風景[「論壇散策」]『言論人』175、9月25日

ハイデルベルクの友[「文化」]『日本経済新聞』10月17日[『赤門うちそと』収録]

オリンピックとアラブ・ゲリラ『自由』14-11、11月1日[『赤門うちそと』収録]

講演会の開催担当[「私の学生時代」]『日本経済新聞』11月13日[「私の学生時代」と改題『赤門うちそと』収録]

日中接近のバランスシート[「論壇散策」]『言論人』181、11月25日

ナショナリズムは甦えるか—田中・大平外交の背後にあるもの—[「特集日中復交とその後にくるもの」]『自由』14-12、12月1日[対談：神谷不二]

虚偽と強制の中の北朝鮮 興味深い マーク・ゲインの報告[「論壇散策」]『言論人』184、12月25日

## 1973 (昭和48) 年

激変する環境と人間[「特集 教育101年の課題」]『総合教育技術』27-12、1月1日[対談：岸田純之助]

1973年の世界と日本『言論人』185、1月5日

日本は“未知の流れ”をどう乗り切るか(新春座談会)『週刊ダイヤモンド』61-2、1月6日[座談会：矢島鈞次、村松剛、石川忠雄]

面白くない今月の論文「サイゴンの憂鬱」は例外 南ベトナムの危惧をルポ[「論壇散策」]『言論人』187、  
1月25日

大学どうあるべきか[インタビュー]『読売新聞』2月20日

すぐれた清水氏の天皇論 適切な指摘、鋭い分析 知識人論としても面白い[「論壇散策」]『言論人』190、  
2月25日

大学と「改革」[講演・討論(於第45回月例懇談会)]『日本文化会議月例懇談会収録集』45、2月28日

日本共産党の回答を読んで 楽観的なあまりに楽観的な『文芸春秋』51-4、3月1日[座談会：福田恆存、  
加藤寛、久住忠男][「楽観的な、あまりに楽観的な」<福田恆存対談・座談集 第3巻>(玉川大学出版  
部、2011年)収録]

大学教育をめぐる『言論人』193、3月25日[対談：鈴木重信]

追悼・池島信平さん『歴史と人物』3-5、5月1日[『赤門うちそと』収録]

東大総長は勝海舟たれ『中央公論』88-5、5月1日[対談：永井道雄]

ベルツとリース[「歴史手帖」]『日本歴史』300、5月1日[『赤門うちそと』収録]

総長と学長『心』26-7、7月1日[『赤門うちそと』収録]

リース博士のこと『文芸春秋』51-12、8月1日[「ルートヴィヒ・リースのこと」と改題『赤門うちそ  
と』収録]

新聞検事『心』26-11、11月1日

望田幸男著『近代ドイツの政治構造』[「書評」]『史学雑誌』82-12、12月20日

\*ワイマール共和国の崩壊『エグゼクティヴ・ゼミナール』17、12月[『歴史の精神』収録]

## 1974 (昭和49) 年

木村健康さんのこと[「木村健康追悼」]『心』27-3、3月1日[『赤門うちそと』収録]

文化の伝播と交流『国際交流』1、3月20日

\*新入生を迎えるにあたって 洋書の匂い『[東京大学]教養学部報』1071、4月10日[「洋書の匂い」と改題  
『赤門うちそと』収録]

[談「特集ガイド 禅寺めぐり」]『太陽』12-7、6月12日

歴史の理論と方法[「特別講演」]『信濃』26-7、7月1日[『歴史の精神』収録]

\*対照と類似『[東京大学茶道部]つたかずら』7月[『赤門うちそと』収録]

なつかしきかな「安保時代」『自由』16-8、8月1日[対談：E. サイデンステッカー]

一高時代の思い出[「回想と所感—その二」]『向陵』16-2<一高百年記念>、10月31日[『赤門うちそ  
と』収録]

## 1975 (昭和50) 年

教育問題について『信濃教育』1078、1月1日

日本の将来に直言する 昭和五十年からの出発『正論』12、1975. 2月1日[対談：鹿内信隆]

春の雪[「日記から」]『朝日新聞』3月31日[日記から『赤門うちそと』収録]  
紅梅の花[「日記から」]『朝日新聞』4月1日[日記から『赤門うちそと』収録]  
国体協[「日記から」]『朝日新聞』4月2日[日記から『赤門うちそと』収録]  
小鳥たち[「日記から」]『朝日新聞』4月3日[日記から『赤門うちそと』収録]  
枢軸時代[「日記から」]『朝日新聞』4月4日[日記から『赤門うちそと』収録]  
長寿[「日記から」]『朝日新聞』4月5日[日記から『赤門うちそと』収録]  
日蘭研究所[「日記から」]『朝日新聞』4月7日[日記から『赤門うちそと』収録]  
風景画[「日記から」]『朝日新聞』4月8日[日記から『赤門うちそと』収録]  
帝国主義[「日記から」]『朝日新聞』4月9日[日記から『赤門うちそと』収録]  
児雷也[「日記から」]『朝日新聞』4月10日[日記から『赤門うちそと』収録]  
富士山[「日記から」]『朝日新聞』4月11日[日記から『赤門うちそと』収録]  
白線と短剣[「日記から」]『朝日新聞』4月12日[日記から『赤門うちそと』収録]  
\*新入学生への言葉[4月12日、東京大学昭和50年度入学式式辞要旨]『[東京大学]学内広報』281、月日未詳[『赤門うちそと』収録]  
中国訪問記―偉大な建前の国『朝日ジャーナル』17-21、5月16日[「偉大な建前の国」と題して『赤門うちそと』、「中国の旅」『[東京大学]教養学部報』1115、5月19日と併せて「学術文化訪中使節団」と題して『わが師わが旅』収録]  
中国の旅『[東京大学]教養学部報』1115、5月19日[『赤門うちそと』収録、「中国訪問記―偉大な建前の国」(『朝日ジャーナル』17-21、1975年5月16日)と併せて「学術文化訪中使節団」と題して『わが師わが旅』収録]  
中国を見る『心』28-8、8月1日[座談会：堀江薫雄、弥永昌吉]  
教師と聖職[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』9月2日[「直言」]『赤門うちそと』収録]  
沖繩・ルソン[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』9月9日[「直言」]『赤門うちそと』収録]  
チェコの話[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』9月16日[「直言」]『赤門うちそと』収録]  
ディルタイ著村岡哲訳『フリードリッヒ大王とドイツ啓蒙主義』[「新刊紹介」]『史学雑誌』84-9、9月20日  
超法規[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』9月23日  
社会と大学[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』9月30日[「直言」]『赤門うちそと』収録]  
西洋の近代劇[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』10月7日[「直言」]『赤門うちそと』収録]  
フィリピン[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』10月13日[「直言」]『赤門うちそと』収録]  
鷗外と歴史、全国大学保健管理研究集会特別講演(於国立教育会館)、10月16日[『赤門うちそと』収録]  
DAAD[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』10月21日[「直言」]『赤門うちそと』収録]  
国民参政八十五年、国民参政85周年・普選50周年・婦人参政30周年記念講演(於国立劇場)、10月22日[『赤門うちそと』収録]  
トインビー[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』10月28日[「直言」]『赤門うちそと』収録]

ビスマルクとシュトレゼマン[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』11月4日[「直言」]『赤門うちそと』収録]  
大学百年[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』11月11日[「直言」]『赤門うちそと』収録]  
ソウルの秋[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』11月18日[「直言」]『赤門うちそと』収録]  
平等主義[「直言」]『サンケイ新聞[夕刊]』11月25日[「直言」]『赤門うちそと』収録]

## 1976 (昭和 51) 年

[「Lobby」]『放送朝日』259<12月号>、1月1日  
国民参政八十五年『言論人』293、1月5日  
旧制高等学校を想う『旧制高等学校史研究』7、1月25日  
\*君主制と天皇制『斎寧』6月[『歴史の精神』収録]  
今日の大学の問題[講演要旨]『経済人』30-8、8月1日[『歴史の精神』収録]  
世界史の中の日本[特集 信濃教育会創立九十周年記念総集会 招待員講演]『信濃教育』1077、8月1日  
社会思想家としての小泉信三博士[「小泉信三博士没後十年記念講演」]『三田評論』762、8月1日  
特殊と普遍[青年部全国大会記念講演]『淡交』30-9、9月1日  
世界史からみた日本『自警』58-10、10月1日

## 1977 (昭和 52) 年

歴史とフィクション—真の歴史の精神とは何か『諸君!』9-1、1月1日[『歴史の精神』収録]  
新聞記事『[国立大学協会]会報』75、2月28日  
父親のあるべき姿とは『波』11-4、4月1日  
いまの世の中[「新人職員に贈る言葉」]『官公労働』31-4、4月15日  
教育の基本に文化を—教育の女性化・私事化を排す—『改革者』18-2[206]、5月1日[座談会：鈴木重信、木村尚三郎]  
東大の虚像実像 角を矯めて牛を殺す如き東大批判に反論する『文芸春秋』55-6、6月1日  
日本の教育と入試『三田評論』771、6月1日[鼎談：黒羽亮一、高村象平]  
文化と税金[「直言」]『サンケイ[夕刊]』6月4日  
ドイツの大学[「直言」]『サンケイ[夕刊]』6月11日  
挙国一致[「直言」]『サンケイ[夕刊]』6月18日  
慶大事件[「直言」]『サンケイ[夕刊]』6月25日[「商学部入試漏洩・中等部問題関係資料その(2)」]『三田評論』773、1977年8月1日に転載]  
おだやかさと闘魂と[「中村菊男先生を追悼する」]『改革者』18-3・4[207・208]、7月1日  
若さ[「直言」]『サンケイ[夕刊]』7月2日  
ジャワ原人[「直言」]『サンケイ [夕刊]』7月9日  
この人にきく[きく人：河本晃]『時の動き』21-15、7月15日



「足きり」[「直言」]『サンケイ[夕刊]』7月16日  
易入難出 [「直言」]『サンケイ[夕刊]』7月23日  
時代と美[「直言」]『サンケイ[夕刊]』7月30日  
プロフィール『諸君!』9-8、8月1日  
大河歴史[「直言」]『サンケイ[夕刊]』8月13日  
学問にふさわしい環境を[「大学再考」]『日本経済新聞』8月15日[「大学の役割」と改題『歴史の精神』収録]  
社会党異変[「直言」]『サンケイ[夕刊]』8月20日  
最近のドイツの大学を見て『日独月報』285、8月25日[『歴史の精神』収録  
ありのままの事実[「直言」]『サンケイ[夕刊]』8月27日  
できた道つくった道[「ひとこと」]『みち』31<日本道路公団>9月[新稿に追加して「鑑真和尚パリへ行く」と題して『わが師わが旅』収録]  
就職ということ[「特集大卒者の就職」]『厚生補導』136、10月10日  
歴史と人物[「随想」]『中等教育資料』26・13、10月15日  
ロシア革命、完全なる失敗一何のための革命だったのかー『改革者』18-9[213]、12月1日[座談会：関嘉彦、志水速雄]

## 1978 (昭和 53) 年

アメリカの大統領[「今月の言葉」]『中央公論』93-1、1月1日  
いま一つの歴史[「今月の言葉」]『中央公論』93-2、2月1日  
前衛党[「今月の言葉」]『中央公論』93-3、3月1日  
摩寿意善郎君の思い出[「追悼 摩寿意善郎」]『日伊文化研究』16、3月31日  
外交政策の優位? [「今月の言葉」]『中央公論』93-4、4月1日  
成田雑考『自警』60-5、5月10日  
パリの春風[「今月の言葉」]『中央公論』93-5、5月1日  
「革新」と近代化[「今月の言葉」]『中央公論』93-6、6月1日  
七月と革命[「今月の言葉」]『中央公論』93-7、7月1日  
日本人よ何処へ行く[「シリーズ特別対談」]『週刊読売』37-31、32、7月23、30日[対談：土居健郎]  
日本の原点[「今月の言葉」]『中央公論』93-8、8月1日  
関東大震災の回顧[「今月の言葉」]『中央公論』93-9、9月1日  
トライチケという歴史家[「史書を読む」]『歴史と人物』8-9、9月1日  
成田雑考 暴徒に比べて警察の生命尊重しない風潮『旭の友』32-10、10月1日  
歴史の教訓[「今月の言葉」]『中央公論』93-10、10月1日  
歴史と科学[「今月の言葉」]『中央公論』93-11、11月1日

南の国で考えたこと[「随想」]『文部時報』1218、11月10日

原則的思考[「今月の言葉」]『中央公論』93-12、12月1日

### 1979 (昭和 54) 年

三度目の訪中[「特集 歌舞伎中国親善公演報告 団長の眼」]『演劇界』37-3、3月1日

「反文革」の波の中を 文革時代、四人組時代につづく三度目の訪中記『諸君!』11-4、4月1日[「歌舞伎団長の記」(『人民中国』310、4月5日)と併せて「歌舞伎団長の記」と題して『わが師わが旅』収録]

歌舞伎団長の記『人民中国』310、4月5日[「反文革」の波の中を 文革時代、四人組時代につづく三度目の訪中記](『諸君!』11-4、4月1日)と併せて「歌舞伎団長の記」と題して『わが師わが旅』収録]

世界史像あれこれ『歴史と地理』286、6月28日

あるマルキシストの死[「随筆」]『中央公論』94-7、7月1日

琴の音[「夏季特集 国際児童年とはいうけれど=果たして子どもは幸せか 私の心に残る宝物」]『月刊保育とカリキュラム』28-8、8月1日

扶餘を訪れて『月刊韓国文化』1-3、12月5日[『わが師わが旅』収録]

大学問題について『文教』9、12月20日[10月22日対談：劔木亨弘、村山松雄]

### 1980 (昭和 55) 年

バルカンの日本語ファン[「随想」]『現代』14-1、1月1日

戦後教育の諸問題『進路指導』53-1、1月

自然に直面する心[「教師への年賀状」]『総合教育技術』34-12、1月1日

イデオロギー以後『文芸春秋』58-1、1月1日

参議院廃止論[「物言わぬは腹ふくるる」]『諸君!』12-3、3月1日

田中美知太郎著『プラトンⅠ 生涯と著作』学問の真髄に迫る面白さ『文化会議』130、4月1日[「『プラトンⅠ 生涯と著作』を読む」と改題『田中美知太郎全集第23巻月報』(筑摩書房、1988年8月)収録]

世界の中の日本[講演]『自治研修』242、8月10日

しらの活用[巻頭]『厚生補導』171、9月10日

歴史への関心—1979年度斎藤学術講演—『東京女子大学紀要論集』31-1、9月20日

### 1981 (昭和 56) 年

文化交流について『人と国土』6-5、1月1日

ものに即する心『文芸春秋』59-1、1月1日

冬の旅『文芸春秋』59-2、2月1日[『わが師わが旅』収録]

学びの出発 もてはやされた理論の生命『中央公論』96-3、3月1日

バルカンの親日国『文芸春秋』59-3、3月1日[『わが師わが旅』収録]

ロンドンの「江戸展」『文芸春秋』59-4、4月1日[『わが師わが旅』収録]

荒畑寒村と自由『文芸春秋』59-5、5月1日

天皇誕生日『文芸春秋』59-6、6月1日

隣の国『文芸春秋』59-7、7月1日[『わが師わが旅』収録]

校内暴力から無責任日教組まで教育を狂わせたのは誰か!『週刊現代』23-33、7月30日[対談:藤原弘達]

インドの舞踊劇『文芸春秋』59-9、8月1日

八月十五日『文芸春秋』59-10、9月1日

知らない町『かんぽ資金』40、9月1日

今井登志喜先生を想う[「特集 今井登志喜の人と思想」]『信濃教育』1139、10月1日

九月十八日『文芸春秋』59-11、10月1日

北京と長春『文芸春秋』59-12、11月1日[『わが師わが旅』収録]

小発見『文芸春秋』59-13、12月1日

## 1982 (昭和 57) 年

ジャパン・イン・ロンドン『文芸春秋』60-1、1月1日[『わが師わが旅』収録]

将軍の遺産?『文芸春秋』60-2、2月1日

ポーランド悲歌『文芸春秋』60-3、3月1日

内と外の日本『文芸春秋』60-4、4月1日

ポーランド再論『文芸春秋』60-6、5月1日

タイの表情『文芸春秋』60-7、6月1日[『わが師わが旅』収録]

インドネシアいろいろ『文芸春秋』60-8、7月1日[『わが師わが旅』収録]

海外の日本語『文芸春秋』60-9、8月1日

教師は教育を「天職」と考えよ『経営者』36-9、9月1日

カリブ海の真珠『文芸春秋』60-10、9月1日[『わが師わが旅』収録]

鈴木貫太郎とトーマス・マン『文芸春秋』60-12、10月1日

「国家」を見極める思想 国家行動の中に倫理性を求めたマイネッケの国家論[「私の古典と戦後」]『Voice』58、10月1日[「『近代史における国家理性の理念』国家を見極める思想」と改題『古典の愉しみ』(PHP 研究所、1983年1月19日)収録]

軍国主義『文芸春秋』60-13、11月1日

江華島『文芸春秋』60-14、12月1日[『わが師わが旅』収録]

## 1983 (昭和 58) 年

アセアン諸国との文化交流『大阪貿易館報』1月1日

日本文化と西洋文化『文化庁月報』172、1月25日

\*自衛と平和主義『山形新聞』2月18日[『わが師わが旅』収録、ただし初出掲載を確認できない]  
あたりまえのこと『青少年問題』30-4、4月1日  
マルクス史学からドイツ史学への道[『若き日の人と学との出会い』『知識』30、4月1日  
国際文化交流と日本語教育[『特集日本語教育の現状と今後の展望』『日本語教育』50、6月15日  
運動はやらなくていいというから...[『インタビュー参院選一六党の借りた顔と自前の顔』『朝日ジャーナル』25-27、6月24日  
教育への情熱を政治の場で一国際交流推進と教育再建に取組む林元東大学長の意欲と構想[『参院選勝利と今後の政局<特集>』『月刊自由民主』331、7月15日[対談：草柳大蔵]  
参議院を討論の府に『改革者』24-5、9月1日[編集部による聞き取り：林健太郎、関嘉彦]  
地下鉄好き『パンガード』4-11、11月1日  
伝統文化保存に技術協力を[『らんだむと〜く』『国際協力』344、12月1日

### 1984（昭和59）年

日本人にとって国家とは何か『パンガード』5-1、1月1日  
十五年今昔[『財』日本文化会議創立十五周年に寄せて]『文化会議』175、1月1日  
塾を学校として認めよ 戦後の"悪平等"が学校をダメにした『現代』18-2、2月1日[座談会：西尾幹一、鈴木由次]  
会頭対談『50億』21-2[通巻239]、2月1日[対談：日本青年会議所会頭齋藤志二][『教育の欠陥』と題して『21世紀への開拓者たち』(サンケイ新聞社、1985年)収録]  
一高の精神『波』18-4、4月1日[『ギリシア悲劇』と改題『わが師わが旅』収録]  
地下鉄漫筆[『随想』『日本地下鉄協会報』27、5月30日  
第二回亜細亜服飾研究会議によせて『国際服飾学会誌』1、8月7日  
まずは経験を積んで[『学者政治家』『朝日新聞』8月18日  
現代のソクラテス[『さようなら竹山道雄先生』『諸君』16-9、9月1日  
わが青春の愛読書 嚶鳴堂図書室『短歌』31-10、10月1日  
文化の継承と創造について 戦後の教育思想を超えて[講演]『望星』15-10、10月1日

### 1985（昭和60）年

中央公論と私[『中央公論一〇〇年によせて』『中央公論』100-1、1月1日  
世界史の中の天皇 天皇の御存在と世界の君主制『祖国と青年』76、1月1日[対談：加瀬俊一]  
大帝ヒロヒトの時代『文芸春秋』63-3、3月1日[座談会：山本七平、渡部昇一]  
教育と文化の基本認識を質す[第102回通常国会参議院予算委員会(3月15日)総括質問「国会議事録を洗う」]『国会月報』32-5、5月1日  
世界一優秀な日本警察[『警察への評価と意見』『季刊現代警察』12-2、6月10日  
みんなが教育「偉く」なれる教育なんてない[藤原弘達の「激動を射る」(第七回)]『プレジデント』23-7、7

月 1 日[座談会：藤原弘達、高正堯]

教育問題について[4 月 25 日東京支部講演抄録]『蔵前工業会誌』806、7 月

国家を否定する論理[「日の丸・君が代 発言のひろば」]『季刊教育法』58、8 月 20 日

全体主義が世界大戦を生む[「特集歪められた戦争観をただす われわれは戦争から何を学んだか」]『知識』1-9[45]、9 月 1 日[「両世界大戦原因の考察」と改題]『歴史からの警告』収録]

エリート教育の不在を憂う[「特集さようなら戦後教育」]『知識』1-10[46]、10 月 1 日[対談：会田雄次]

アメリカ教育事情雑感[「投稿」]『世界思想』12-1、12 月 25 日[「わが師わが旅」収録]

## 1986 (昭和 61) 年

二十一世紀に備えて[「特集どうなる？明日の日本」]『バンガード』7-1、1 月 1 日

田中美知太郎先生のこと[「追悼 田中美知太郎」]『文芸春秋』64-2、2 月 1 日

私の転機 河合教授の軍部批判『朝日新聞[夕刊]』2 月 4 日

21 世紀は日本"文化"の時代か『バンガード』7-4、4 月 1 日[対談：飯塚毅]

先生と歴史認識[「田中美知太郎先生を悼む」]『文化会議』202、4 月 1 日[「田中美知太郎先生と歴史認識—『ツキユディアスの場合』をめぐって」と改題]『田中美知太郎全集第 12 巻月報』(筑摩書房、1988 年 10 月)収録]

国際化と歴史教育[「議員の目」]『月刊自由民主』366、7 月 15 日

教科書問題を考える『文芸春秋』64-10、10 月 1 日[「『文芸春秋』にみる昭和史 第 3 巻」(文芸春秋、1988 年)、[「『文芸春秋』で読む戦後 70 年 第 2 巻」<文春ムック>(文芸春秋、2015 年)収録]

## 1987 (昭和 62) 年

クマエの巫女[「美 私の一点」]『信濃毎日新聞』3 月 30 日[「わが師わが旅」収録]

税金、教育そして国会『正論』177、5 月 1 日[1 月 26 日対談：福田幸弘][「税制改革への歩み 福田幸弘対談集」(税務経理協会、1987 年 8 月 10 日)収録]

ジャーナリスティックな関心を持ち続けた哲学の泰斗の言論集成『戦後四十年の発言 政治・教育・社会』田中美知太郎著 加来彰俊・北嶋美雪編集・解説[「文春ブック・クラブ ブック・ハンティング」]『文芸春秋』65-8、7 月 1 日

坂本太郎博士追悼[「歴史手帖」]『日本歴史』470、7 月 1 日

教育の健全化は国家的急務—今なお罷り通る偏向教科書—[インタビュー]『政経人』34-8、8 月 1 日

有漏路の旅[「随筆特集 旅と人生」]『オール読物』42-9、9 月 1 日

## 1988 (昭和 63) 年

歴史教育はなぜ大切か[「特集歴史科」独立のどこが悪い!』『諸君!』20-1、1 月 1 日 [「歴史科独立賛成の論拠」(『三田評論』890、1988 年 3 月)とともに、「歴史科の独立について」『戦後五十年の反省』収録]

わが思い出の一番 一閃吉葉山宙に舞う[昭和 27 年秋場所 14 日目栃錦—吉葉山]『大相撲』34-2、2 月 1 日

歴史科独立賛成の論拠[「時の話題 高等学校社会科の再編」]『三田評論』890、3月1日[「歴史教育はなぜ大切なか(『諸君!』20・1、1988年1月)とともに、「歴史科の独立について」]『戦後五十年の反省』収録]

「世界史の時代」を読む[「特集 国際化の中の世界史」]『知識』4・4[76]、4月1日[対談：大間 一男]

なぜ国会は「見世物小屋」になったか[「藤原弘達の「激動を射る」」]『プレジデント』26・5、5月1日[対談：藤原弘達]

「奥野発言」にみる歴史誤認『知識』81、9月1日[「奥野大臣発言」の問題性と]改題『歴史からの警告』収録]

歴史観と現実政治『改革者』29・6・7[338]、10月1日[対談：漆山成美]

昭和思想史と清水幾太郎『諸君!』20・10、10月1日[『戦後五十年の反省』収録]

日本共産党の天皇批判を批判する『文芸春秋』66・14、12月1日[「日本共産党の天皇批判の批判」と改題『歴史からの警告』収録]

### 1989 (昭和64・平成元) 年

歌舞伎エジプトに行く『古代オリエント』5、1月1日[「カイロの歌舞伎」(『オール読物』44・1、1989年1月)と併せて「カイロの歌舞伎」と題して『わが師わが旅』収録]

カイロの歌舞伎『オール読物』44・1、1月15日[「歌舞伎エジプトに行く」(『古代オリエント』5、1989年1月)と併せて「カイロの歌舞伎」と題して『わが師わが旅』収録]

同じ朝[「私が天皇の死を聞いた瞬間」]『週刊文春』31・4、1月19日

大行天皇への拝謁[「随筆」]『政界往来』55・3、3月1日

近代史の中の昭和時代と天皇[「特集天皇と昭和」]『知識』5・3[87]、3月1日

昭和時代の終焉『中央公論』104・3、3月1日[座談会：阿川弘之、伊藤隆、佐伯彰一、村松剛]

戦争責任とは何か ニつの至上命令のはざまに生きた昭和天皇『文芸春秋』67・4<特別号「大いなる昭和」>3月10日[「戦争責任というもの」と改題『歴史からの警告』収録]

社会党躍進で日本は10年遅れるーオバタリアンの愚かな選択『週刊文春』31・32、8月10日

山水鳥話『朝日新聞[夕刊]』9月1、8、22、29日【武蔵野の今昔、樹々いろいろ、緑保存の担い手、森と鳥と水と】[「わが住処武蔵野今昔」と改題『わが師わが旅』収録]

やっぱり社会党には任せられない[「特集連合時代は来るのか」]『知識』5・10[94]、10月1日[対談：伊藤憲一]

### 1990 (平成2) 年

「倨傲の宗教」の終焉『諸君!』22・1、1月1日[「マルクスの誤算 ソ連・東欧大変動を検証する」(文芸春秋、1990年)、『歴史からの警告』収録]

一〇〇ワット電球のメッセージ[「90年代世界はどうなる日本はどうなる」]『文芸春秋』68・3<臨時増刊>2月20日[『わが師わが旅』収録]

張作霖の友人[「巻頭エッセイ」]『オール読物』45・3、3月1日[『わが師わが旅』収録]

総選挙を考える 国民は何を審判すべきか『文芸春秋』68・4、3月1日[対談：猪木正道]

昭和という時代『知識』6・5～7、9～12、7・1～12、8・1～3[102～104、106～124]、5月1日、6月1日、

7月1日、9月1日、10月1日、11月1日、12月1日、1991年1月1日、2月1日、3月1日、4月1日、5月1日、6月1日、7月1日、8月1日、9月11日、10月1日、11月1日、12月1日、1992年1月1日、2月1日、4月1日【1 金融恐慌と六中時代、2 南京事件と山東出兵、3 張作霖事件と天皇の悲劇、4 昭和初期の旧制高校、5 プロレタリア雑誌を読み耽った日々、6 西洋史との出会いと滝川事件、7 ニ・二六事件と学者への道、8 スペインの内乱とシナ事変、9 大内兵衛の休職処分、10 太平洋戦争開戦と私の召集、11 敗戦から戦後へ、12 共産党シンパから社会党シンパに、13 東京帝国大学から東京大学への変身、14 冷戦のはじまり、15 清水幾太郎と全面講和運動、16 進歩的文化人との最初の論争、17 六〇年安保騒動の前夜、18 二年間の欧米留学、19 ベルリンに壁がつくられた時、20 安保騒動後の日本、21 東大紛争一七三時間の軟禁、22 昭和は終わりベルリンの壁は崩れた】【一部表題を改め『昭和史と私』(文芸春秋、1992年)刊。文春文庫 2002年、文春学芸ライブラリー(文庫)、2018年】

\*美術開眼の師『緑樹』6月【『わが師わが旅』収録】

現代の奇跡・ドイツ統一『諸君!』22-10、10月1日【『戦後五十年の反省』収録】

閣僚より正確な歴史認識を持っていた【「昭和天皇独白」私はこう読んだ】『週刊文春』32-44、11月22日

## 1991(平成3)年

日本の知識人とマルキシズム『文化会議』259、1月1日

自己弁護ではない【「昭和天皇独白録—私たちの衝撃」】『文芸春秋』69-1、1月1日

「共同の家」はできるか【「特集 鳴動する大欧州」】『This is 読売』1-11、2月1日【「バリ憲章とヨーロッパ共同の家」と改題『歴史からの警告』収録】

パシフィストの論理を排す【「特集 湾岸戦争の嵐日本人に残された選択」】『文芸春秋』69-3、3月1日【「湾岸戦争とアラビスト、パシフィストの論理」と改題、「湾岸戦争と日本国憲法」『歴史からの警告』収録】

\*今一番大事なこと『日刊福井』4月【「湾岸戦争が残したもの」と改題、「湾岸戦争と日本国憲法」『歴史からの警告』収録】

ロンドンの地下鉄【「随想」】『This is 読売』2-2、5月1日<pp.30-31掲載>【『わが師わが旅』収録】

今日の世界状況と小泉信三『野田経済』1515、5月1日【『歴史からの警告』収録】

当面「成果なし」は失敗にあらず【「特集・日ソ100年の大計を誤るな!」】『文芸春秋』69-6、5月1日

学校茶道への期待【「特集淡交会50年の歩み 第4章学校茶道の歩み」】『淡交』45-7、7月1日

太平記は史学に益なし?【「随筆」】『中央公論』106-8、8月1日

エリツィンにその気はないが北方領土返還要求を【「ソ連崩壊 私はこう考える」】『週刊文春』33-33、9月5日

地道な努力によって究明された”日本軍の暴虐”の真相 中島みち『日中戦争いまだ終らず マレー「虐殺」の謎』【「文春図書館」】『週刊文春』33-35、9月19日

「ユートピア」の葬送『諸君』23-11、11月1日【座談会：猪木正道、武藤光朗】『「諸君!」の30年1969～1999』(文芸春秋、1999年)収録】

革命はその子を貪り食った【「共産主義大研究 20世紀の虚構」】『This is 読売』2-8、11月1日【『歴史からの警告』収録】

## 1992（平成4）年

師弟関係の復活を[「私の提言」]『日本教育』188、1月1日

憲法の正しい解釈の確立[「政治一流国への道 宮沢政治の仕事」]『Voice』169、1月1日

一九二三年という年[「特集『文芸春秋』と私」]『文芸春秋』70-2、2月1日[『歴史からの警告』収録]

マルクス主義との格闘[「再録 二十一世紀を予言した七の論文「常識の立場」」]『文芸春秋』70-2、2月1日[『文芸春秋』37-6、1959年6月の再録]

現代の状況を歴史家としての視野から考察 野田宣雄『歴史の危機』[「文春図書館」]『週刊文春』34-16、4月23日

村川堅太郎教授の人と業績[「追悼 村川堅太郎先生」]『歴史と地理』441、5月20日

「清水幾太郎著作集」刊行にあたって『本』17-6、6月1日[聞き手：植田康夫]

「先縁尊重」を語る『致知』205、8月1日[対談：山中典士]

参議院選後の重要課題『月曜評論』8月24日[「日本国憲法の問題点」と改題、「湾岸戦争と日本国憲法」]『歴史からの警告』収録]

国家は歴史によってつくられる[高瀬廣居によるインタビュー]『月刊公論』25-11、12、11月1日、12月1日

## 1993（平成5）年

歴史教育の重要性[「特集日本の教育を語る」]『日本教育』199、1月1日

世界初のテクノアート美術館[インタビュー]『ジェトロセンサー』43-1、1月15日

ヨーロッパとは何か 歴史における民族・国家を超える企て『国際交流』16-1、4月30日[鼎談：樺山紘一、野田宣雄]

「ドイツ」を愛した正統派政治史家 G.P.リーチ[「私の推す哲人」]『経済往来』45-6、6月1日

社会党に政権参加の資格ナシ[「オピニオンワイド 政治家を改革せよ」]『週刊文春』35-27、7月15日

関東大震災前後『ノーサイド』3-9、9月1日[「わが師わが旅」収録]

医学を信頼している。だから怖くない[「闘病宣言逸見政孝さんに寄せる 私はこうして癌から生還した」]『週刊朝日』98-41、9月24日

『東京裁判史観』というもの『正論』255、11月1日[「東京裁判史観」論議」と改題『歴史からの警告』収録][英語訳：**Japanese Perspective, Postwar Apology** 『Look Japan』39-?、1994年2月<京大法>

癌と偶然との戯れ『新潮45』12-12、12月1日

近衛新体制の教訓[「新・歴史よもやま話」]『ノーサイド』3-12、12月1日[1993年10月中旬座談会：半藤一利(司会)、野田宣雄][半藤一利編『歴史探偵団がゆく 昭和史が面白い』(文芸春秋、1997年)、<文春文庫>(文芸春秋、2000年)収録]



## 1994（平成6）年

羽仁五郎氏のこと[「歴史手帖」]『日本歴史』548、1月1日

日本政治の自殺『文芸春秋』72-4、3月1日[「歴史からの警告」収録]

フィリピン、ビルマの独立と日本の大陸進出について 田中・伊藤両氏の批判に答える『正論』260、4月1日[「歴史からの警告」収録]

強い左翼史観への反発[インタビュー「戦争をめぐる閣僚たちの歴史認識「永野発言」なぜ繰り返される」]『朝日新聞』5月25日

「永野法相発言」を考える『文芸春秋』72-9、7月1日[「歴史からの警告」収録]

伯父さん、こんにちは『諸君!』26-7、7月1日[対談：林望]

現代の世界情勢と日本[特別講演会講演要旨]『弘道』971、8月31日[「歴史の終わり」と「文明の衝突」と改題『戦後五十年の反省』収録]

村山政権は危険だ[「歴史家は警告する」]『諸君!』26-10、10月1日[「村山政権の成立とその批判」と改題『歴史からの警告』収録][ハングル訳：歴史家는 경고한다－村山政権과 일본 이해야 할 일 『日本포럼』6-6[22]、1994年12月、英語訳：Move into Power 『Japan Echo』21-4、1994年、仏語訳：Une alliance inattendue 『Cahiers du japon』63、1995年、スペイン語訳：Una Alianza perigrosa 『Cuadernps de Japón』8-1、1995年]

歴史の事実と解釈 小堀佳一郎氏の批判に答える『正論』266、10月1日[「歴史からの警告」収録]

日本の政治を考える[「特集日本の政治を考える」]『弘道』972、10月31日[「民意を表わさぬ連立政権」と改題『戦後五十年の反省』]

左と右[「百家争鳴」]『室内』480、12月1日[「わが師わが旅」収録]

国史学界傍観[「国史学界の今昔-36-」]『日本歴史』559、12月1日[聞き手：伊藤隆]

ハングルと漢字『文芸春秋』72-16、12月1日[「わが師わが旅」収録]

## 1995（平成7）年

霊に捧ぐ[「追悼 福田恒存」]『諸君!』27-1、1月1日[「追悼 福田恒存」と題して『戦後五十年の反省』収録]

中国ナショナリズムと国際共産主義 小堀佳一郎氏との論争の総括『正論』269、1月1日[「歴史からの警告」収録]

修正主義いろいろ[「歴史手帖」]『日本歴史』560、1月1日[「修正主義いろいろ」の1として『戦後五十年の反省』収録]

日本はアジアと西欧の橋渡しに『外交フォーラム』8-1、1月5日

戦後五〇年とこれからの世界[「特集 戦後五〇年を迎えて」]『弘道』974、2月29日[「弘道」1000、1999年6月再録]

弔辞[「追悼 福田恒存」]『文学界』49-2、2月1日[「特別企画 弔辞 劇的な人生に鮮やかな言葉」]『文芸春秋』79-2(2011年1月)に再録、「福田恒存へ感性と理性と行動力を併せ持った人」と題して『弔辞 劇的な人生を送る言葉』<文春新書>(文芸春秋、2011年)収録]

ドレスデン『波濤』2-4、3月25日[「わが師わが旅」収録]

皇室はよくおやりになった[「関西大震災と日本」]『諸君!』27-4、4月1日[「戦後五十年と阪神淡路大震災」と改題『戦後五十年の反省』収録]

自己を成り立たせる精神[「戦後日本人が失ったもの」]『This is 読売』6-2、5月1日収録

国と歴史を弄んだ政治家たち 戦後日本における「俗言」論『諸君!』27-8、8月1日[「戦後日本における「俗言」論」と改題『戦後五十年の反省』収録]

オウム事件「原因還元論」の弊 恐るべき茶番劇の解釈『正論』276、8月1日[「戦後五十年の反省』収録]

\*繁栄のなかに蓄積された空虚『月刊公論』臨時増刊、夏[「戦後五十年の反省』収録]

歴史における個人の意志力と行動力の重みを、克明な分析で示す ジョン・ルカーチ著秋津信訳『ヒトラー対チャーチル』[「文春図書館」]『週刊文春』37-35、9月14日

真の教育を語るなら「現実」を見つめよ[「平成の黄門—日本の現役を叱る」]『Forbes』4-10、10月1日

## 1996（平成8）年

戦後五十年風景[「研究余録」]『日本歴史』572、1月1日[「修正主義いろいろ」]『日本歴史』560、1995年1月と併せて「修正主義いろいろ」の2として『戦後五十年の反省』収録]

国連常任理事国入りの意味[「特集 国連と日本」]『弘道』980、2月29日[「国家常任理事国入りの必要」と改題『戦後五十年の反省』収録]

村山内閣の歴史的「意味」『諸君!』28-3、3月1日[「戦後五十年の反省』収録]

戦後50年の日本と世界『防衛学研究』15、3月31日

これからの教育の在り方 戦後教育をふりかえって[「日本教育設立二十周年記念特集」]『日本教育』235、4月1日[座談会：岡本道雄、鈴木勲、市村眞一、青木生子、沖原豊]

一九八九年を忘れるな『正論』285、5月1日[「戦後五十年の反省』『別冊正論 Extra04 大東亜戦争—日本の主張』(産経新聞社、2006年10月23日)収録]

二つの反米主義への疑問[インタビュー「日本外交への提言」]『外交フォーラム』9-6、6月5日

国家と道徳[「特集 国家と道義」]『弘道』982、6月30日

今日の教科書問題『弘道』984、10月31日

[「会員寄言」]『弘道』984、10月31日

「戦争」とは何か『本の話』2-12、2月1日[対談：児島襄]

## 1997（平成9）年

政党の不毛を叱る[「COVER TALK」]『改革者』38-1[438]、1月1日

教科書問題その後の経過について[「特集 倫理復興」]『弘道』986、2月28日

教科書で書くべき歴史[「ここがおかしい!歴史教科書論争」]『This is 読売』7-12、3月1日[「別冊正論 Extra04 大東亜戦争—日本の主張」(産経新聞社、2006年10月23日)収録]

カンボジアの学校づくり—海外のボランティア学生たち—『正論』295、3月1日

名著「二十世紀」[「追悼 尾鍋輝彦先生」]『歴史教育研究』79、3月1日

心の教育を考える[「特集 心の教育を考える」]『弘道』990、10月31日

中村粲氏の批判に答える『正論』300、8月1日[『別冊正論 Extra04 大東亜戦争－日本の主張』(産経新聞社、2006年10月23日)収録]

### 1998 (平成10) 年

クルト・アイスナーとバイエルン革命[「歴史手帖」]『日本歴史』596、1月1日

随筆的『文芸春秋』76-2、2月1日

中村粲氏の問いに答える[「林・中村「歴史認識」論争」]『正論』309、5月1日[『別冊正論 Extra04 大東亜戦争－日本の主張』(産経新聞社、2006年10月23日)収録]

世界史の中の日本の立場 封建体制に胚胎する「近代」の由来と意義『日本及日本人』1631、7月1日

私の写真館[グラビア解説]『正論』313、9月1日

福田恆存 戦後とは、即ち彼の業績に学ぶことでした[「平成日本 50 人のレクイエム」]『文芸春秋』76-12、12月1日

### 1999 (平成11) 年

丸山真男ブームに苦言『諸君!』31-3、3月1日[聞き手：中川八洋]

東西の神様たちと知り合いになる法[「特集 死ぬための「教養」」]『新潮45』18-5、5月1日

戦後五〇年とこれからの世界[「『弘道』誌上の論説より」]『弘道』1000、6月30日[『弘道』974、1995年2月の再録]

「心の教育」とアイデンティティー新しい世紀の教育課題－[「特集 国旗・国歌と学校教育」]『日本教育』273、10月1日[座談会：鈴木勲、辰野千壽、木山高美]

衝撃はなかった[「著名人100人アンケート あのと看、何を。今は」]『諸君!』31-12、12月1日

### 2000 (平成12) 年

太平洋戦争開戦[「私の「衝撃」の一日」]『文芸春秋』78-2、2月1日

「二十世紀」への感想[「20世紀に想う」]『文芸春秋』78-3、2月15日

1920年という年[「コラム」]『朝日クロニクル週刊20世紀』58、3月19日

## 付 国会会議録

第 101 回国会参議院文教委員会会議録 第 2 号、昭和 59 年 2 月 28 日

第 102 回国会参議院予算委員会会議録 第 7 号、昭和 60 年 3 月 15 日[「国会議事録を洗う－教育と文化の基本認識を質す－第 102 回通常国会 参議院予算委員会(3 月 15 日)総括質問－世界の文明史的見地で見据えよ－教育は国家統治行為の重要策－」と題して『国会月報』32・5、1985 年 5 月収録]

第 102 回国会参議院文教委員会(国会閉会后)会議録 第 1 号、昭和 60 年 7 月 9 日

第 104 回国会参議院予算委員会公聴会会議録 第 1 号、昭和 61 年 3 月 20 日

第 108 回国会参議院外交・総合安全保障に関する調査会委員打合会議事速記録 第 1 号、昭和 62 年 2 月 18 日

第 113 回国会参議院環境特別委員会会議録 第 1 号、昭和 63 年 7 月 19 日[参議院環境特別委員長として]

第 113 回国会参議院環境特別委員会会議録 第 2 号、昭和 63 年 10 月 26 日[同上]

第 114 回国会参議院環境特別委員会会議録 第 1 号、昭和 63 年 12 月 30 日[同上]

第 114 回国会参議院環境特別委員会会議録 第 2 号、平成元年 6 月 19 日[同上]

第 114 回国会参議院環境特別委員会会議録 第 3 号、平成元年 6 月 21 日[同上]

第 114 国会参議院会議録 第 17 号[官報号外]、平成元年 6 月 22 日[参議院環境特別委員長として環境特別委員会における審査の経過及び結果の報告]